

史 跡 **福 山 城** X

平成4年度 発掘調査概要報告

1993・3

北海道松前町教育委員会

序

国指定史跡福山城は、安政元年に完成した我が国最後の旧式築城による城郭であります。文化庁、北海道の補助により、昭和50年度に保存管理計画を策定し、環境整備事業に係る遺構確認調査は昭和55年度以来実施し、今年度は第10次を数えるに至りました。これと同時に石垣の復元工事も進み、とりわけ、櫓手方向からの登城口である馬坂周辺は、徐々に往時の面影をとりもどしつつあります。

今年度は、昨年度に引きつづき外堀と、三の丸地域の発掘調査を実施いたしました。その結果、外堀では、水が大松前川へと落とされる施設や、堀を仕切る施設が新たに発見されました。堀石垣の保存状態も思いの外良好であり、将来の環境整備に向けて、ますます意を強くしているところであります。また、外堀へかかる橋の位置、馬坂門がかつて建てられていた位置も明確になりました。このほか、鉄砲置場や七番台場の位置もほぼ明らかにすることができました。

こうした成果をもとに、史跡福山城が一日も早く古えに復されることを願ってやみません。ここに平成4年度の発掘調査の概要をまとめるにあたり、本書がより多くの方々に活用されることを期待しております。

この事業を遂行するうえで、文化庁、北海道教育委員会をはじめ関係各機関、諸先生方に多大のご指導、ご助言をいただき深く感謝する次第であります。

平成5年3月

北海道松前町教育委員会

教育長 柳 田 由 孝

例 言

1. 本書は、史跡福山城の平成4年度環境整備事業に伴う遺構確認調査の概要報告書である。

2. 本年度の調査は、平成4年7月29日から平成5年2月27日までの間、次の体制で実施した。

調査主体者 松前町教育委員会教育長 柳田 由孝

調査担当者 松前町教育委員会 久保 泰

調査事務局 松前町教育委員会文化財課

調査参加者 赤松順子、川村節子、河田敦子、和田映子、斉藤雅子、佐藤伸子、松田弘子、須藤幸子、能藤勝江、三浦文子、惣蔵則子、林文子、目谷トム子、福野留伊子、斉藤秋子、滝沢節子、佐藤美恵子、森田ヨシ、川村峰子、目谷みよ子、宝福洋子、福野久子、古海みや子、斉藤美和子、可香涼加、加藤由美子、宝福功、沢田仁、東館司、森田潤一、渡辺貞秋、松川笑美

3. 本書の編集、執筆、写真撮影は久保があたった。

4. 遺構実測図整理、トレースは赤松があたった。

5. 遺物実測図、トレースは川村、河田、斉藤、和田、三浦、惣蔵、林があたった。

6. 本年度の調査、整理作業にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導、ご協力をいただいた。(順不同、敬称略)

文化庁記念物課、道教育委文化課、渡島教育局、北大北方資料室、松前町史編集室、加藤允彦、服部英雄、仲野浩、平井聖、浅井潤子、渡辺達三、桑原真人、木村尚俊、北垣聡一郎、永田富智、田村安蔵、西川敏郎、木村建設工業、森電設、

7. 調査によって得られた諸記録、資料は松前町教育委員会が保管する。

目 次

I 調査目的及び調査方法	7	6. 七番御台場	33
1. 調査の目的	7	7. 土 居	37
2. 調査方法	11	8. 東部石垣	38
II 発見された遺構	12	9. 杭 列	38
1. 外 堀	13	10. 側 溝	40
2. 馬坂門	25	11. その他の遺構	43
3. 橋	28	III 出土遺物	46
4. 御鉄砲置所	29	N ま と め	71
5. 御番所	30		

挿 図 目 次

第1図 位 置 図	6	第19図 側溝実測図	42
第2図 調査位置図	8	第20図 外堀調査位置図	44
第3図 遺構位置図	9	第21図 外堀実測図	45
第4図 縄張図(部分、松前神社所蔵)	12	第22図 出土遺物実測図(1)	47
第5図 外堀実測図(1)	14	第23図 出土遺物実測図(2)	48
第6図 外堀実測図(2)	16	第24図 出土遺物実測図(3)	49
第7図 外堀終端部		第25図 出土遺物実測図(4)	50
・東部石垣実測図(1)	17	第26図 出土遺物実測図(5)	51
第8図 外堀終端部		第27図 出土遺物実測図(6)	52
・東部石垣実測図(2)	19	第28図 出土遺物実測図(7)	53
第9図 外堀中仕切部実測図	22	第29図 出土遺物実測図(8)	54
第10図 馬坂門、馬坂橋実測図(1)	26	第30図 出土遺物実測図(9)	55
第11図 馬坂門、馬坂橋実測図(2)	27	第31図 出土遺物実測図(10)	56
第12図 御鉄砲置所実測図	29	第32図 出土遺物実測図(11)	57
第13図 七番御台場付近実測図(1)	31	第33図 出土遺物実測図(12)	58
第14図 七番御台場付近実測図(2)	34	第34図 出土遺物実測図(13)	63
第15図 土居土層図	35	第35図 出土遺物実測図(14)	64
第16図 杭列実測図	39	第36図 出土遺物実測図(15)	65
第17図 二の丸側実測図	40	第37図 出土遺物実測図(16)	66
第18図 調査位置図	41	第38図 出土遺物実測図(17)	67

第39図	出土遺物実測図④	68
第40図	縄文時代の遺物	69

表-1	出土陶磁器観察表	60
表-2	出土金属器観察表	70
付図、外堀全体図		

写真図版目次

図版1	調査開始前・外堀調査状況	76
図版2	外堀（北側より）	
	・外堀（南側より）	77
図版3	外堀終端部・同（東側より）	78
図版4	外堀終端部（東側より）	
	・外堀終端部	79
図版5	外堀中仕切部・同（南側より）	80
図版6	外堀堆積状況	
	・枕列（正面・三本松）	81
図版7	馬坂橋及び馬坂門・柵跡	82
図版8	七番台場跡・不明建物跡	
	・御鉄砲置所	83
図版9	東部石垣・同	84
図版10	忘帰棲排水溝・不明ピット	85
図版11	側溝・同	86

図版12	外堀B区（寺町門付近）	
	・外堀A区	87
図版13	福山城見分図、同部分	88
図版14	出土遺物(1)	89
図版15	出土遺物(2)	90
図版16	出土遺物(3)	91
図版17	出土遺物(4)	92
図版18	出土遺物(5)	93
図版19	出土遺物(6)	94
図版20	出土遺物(7)	95
図版21	出土遺物(8)	96
図版22	出土遺物(9)	97
図版23	出土遺物⑩	98
図版24	出土遺物⑪	99



第1圖 位置図

I. 調査目的及び調査方法

1. 調査の目的

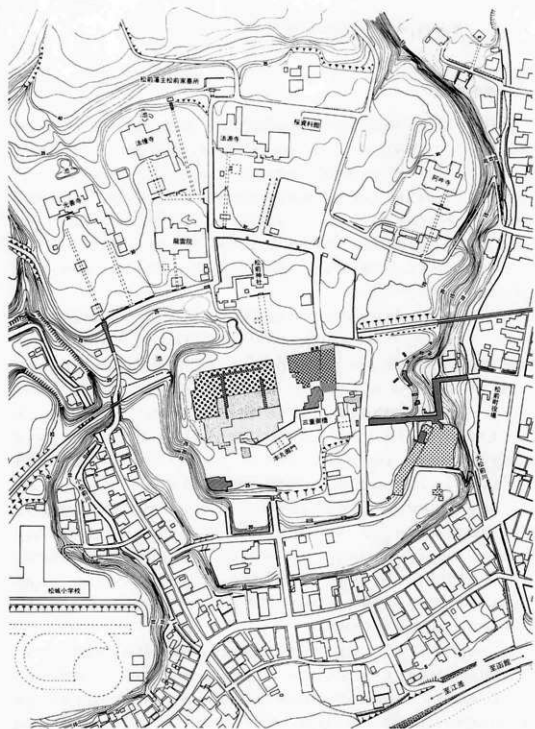
国指定史跡福山城の環境整備事業にかかる遺構確認調査は、昭和55年度に開始して以来十数年を経過している。『史跡福山城Ⅰ～Ⅴ』のほか『松城遺跡Ⅱ・史跡福山城』これらの調査によって内堀、搦手門の一部、本丸表御殿跡、南西の隅櫓、石垣や諸施設などを明らかにしてきたところである。内堀は調査成果を踏まえて復元整備工事を終え、松城小学校の解体とあわせ周辺の景観を一変させてきたところである。また、石垣修理工事は、福山城への主要な登城口の一つであった馬坂周辺を重点的に実施してきており、往時の景観をとりもどしつつある。

平成3年度には、この石垣修理に先立つ石垣基礎部分の確認と、三の丸地域の外堀の一部確認調査を実施してきたところである。

同年度は、こうした国庫補助事業とは別に町道馬坂線の改良工事に伴う事前調査を実施してきたところである。この町道馬坂線は旧城時代の登城坂である馬坂を利用し、福山城取り壊し後、新たに設定された部分を含む道路で、松前町役場横から大松前川を渡って松前城資料館前に至る道路である。距離としては短いものの、松城小学校の通学路として使われ、松前公園（史跡福山城を含む一帯）を訪れる団体観光客のほとんどが利用するという通行量の多い道路である。この道路は一部コンクリート舗装されていたが、しばしば観光客が転倒する事故が起り、不評を買った道路でもあった。そこで町当局ではこれを解消すべく簡易石版ブロック張り、手摺りの設置等の工事を計画し、文化庁と協議のうえ、その事前調査を昨年度実施したのである。

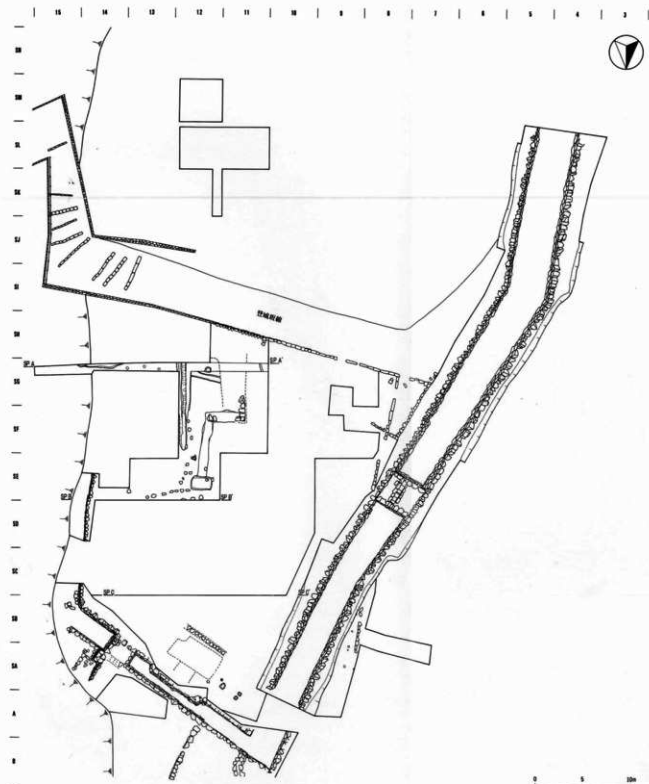
その結果、旧馬坂部分からは階段状の石積みの一部、側溝の石垣、側溝を横断する橋脚部分、石垣の基礎等が発見されたほか、外堀の一部とこれに水を落とす水路、土居の基礎部分とみられる石垣の一部が発見されたのである。これらの中でも外堀の遺存状況は極めて良好であることが分かり、最下部から少なくとも3段以上の石垣が残っていることが判明したのである。かつて馬坂を通して城内三の丸に入る場合、外堀を渡り馬坂門を潜るというルートをとるが、この堀を渡る橋の部分が調査で発見されたのである。

現在、町教委では文化庁、道教委の指導のもと、史跡福山城整備検討委員会を組織している。この委員会では昭和女子大平井教授をはじめ、4名の先生方に様々な角度からのご指導を頂戴している。町道馬坂線の事前調査の折りに検討委員会を開催する機会があり、この際に外堀を含めた三の丸地域から現馬坂線の両側（太鼓櫓、三本松、搦手門等）の復元整備を進めたならば如何かというご指導をいただいたのである。そこで町教委では文化庁・道教委と協議のうえ、平成4年度の遺構確認調査は、外堀の遺存状況を可能な限り調査することとし、併せて馬坂門、外堀を巡る櫓垣、外堀に架かる2ヶ所の橋、六番及び七番台場（砲台）跡、御番所、御鉄砲置場等の遺



0 50 100m

第2図 調査位置図



第3図 遺構位置図

機を明らかにすることとした。町教委は、単独事業として原口館認定地の調査も計画しており、この調査の終了を待って、また、町道八十八ヶ所線に伴う福山城外堀の確認調査も予定してあったので、これらの調査の終了する8月1日より、面積1,980㎡、予算1,420万円で着手した。

2. 調査方法

本年度の調査区は昨年度調査した町道馬坂線と国庫補助事業による調査地域の隣接区であり、これらと整合性をもたせるよう設定した。したがって、従来の調査区（5m×5m）に方位、名称等も昨年度のそれに合致させてある。

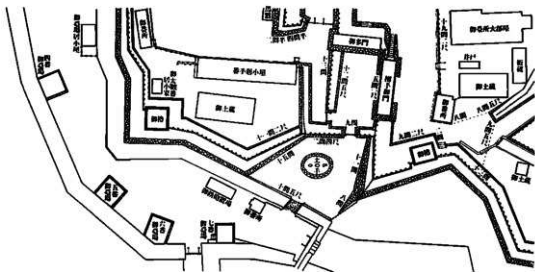
今年度の調査対象地のうち、外堀の大部分は町道下に埋もれていてと推定され、しかもここは松城小学校の通学路に指定されていたため、同校に対し通学路の変更依頼を行なった。また、警察署、消防署に対し、道路使用の届出を提出しておいた。

調査地域は福山城取り壊し後、民間に払い下げられ、明治から大正期にかけては料亭忘帰楼、その後は民家が建っていた場所である。昭和51年以降これらの建物は解体撤去され、跡地は整地されていたものの、立木等はある程度残されたままであった。そこで調査に先立って、松、藤、桜などの可能なものは移植し、不可能なものは伐採を行なった。また、電柱、街灯などがあったが、これらは調査に支障のない区域に移設した。

こうした事前準備を終えたのち、外堀部分については可能な限りバックホーを用いて排土作業を行なった。外堀の重機使用は作業の進捗状況に合わせ、また排土運搬用のトラック通路確保の意味から3度に分け行なった。外堀は深さが地表から約3mにも達すると予想され、ベルトコンベアを3台使用することとした。当初、このベルトコンベア稼動のため発電機を使用した、非能率的なため仮設の配電板をセットした。作業の進展につれ、予想以上に湧水が激しく、そのため排水ポンプの稼動が昼夜必要となった。今年度は排土置場が近くに確保できないため、また当初から外堀は埋めもどす計画ではなかったため運搬車を必要とし、これには2トングンプ1台とキャリア1台を用いた。このように今年度の調査では従来の調査に比べ、多くの器機を使用した。

外堀は後述するように絵図等には表わされていない水の落し口（終端部）や間仕切りが発見されたりして複雑な構造になっていることが分かり、そのため予想以上に時間を費した。また、大松前川に沿った崖際には石垣が残っていることも分かり、調査予定外であったがこの部分の調査も実施した。こうした関係もあって、六番御台場については一部着手したものの、日程の都合で途中で調査を断念した。外堀については、北側約4m間は町道馬坂線確保のため未調査である。更に南西側は法務局松前出張所前の三叉路まで調査予定であったが、昭和54年度に買収した民地の庭木の移植の必要が生じ、これには多額の金額を要することと、常緑樹の移植には時季を失したことから、この移植が完了する明年度以降に継続調査を実施することとした。

遺跡確認後は平面図、正面図、土層図、エレベーション等を作図、写真撮影を行なった。埋めもどしにあたっては外堀については修復工事が終了するまで石垣が剥出しとなるため、石垣の上



第4図 興正園(部分、松前神社所蔵)

に土のう袋を3～4段積み上げておいた。東側崖地部分についても、土砂の崩落防止のため土のうを積み、埋めもどしを行なった。

調査終了後、補正予算(町単費)によって外堀及び東側崖際に柵の設置、庭木の移植を行なった。

Ⅱ. 発見された遺構

今年度の調査では三の丸地区、外堀の調査を主体にこれに対する踏施設、台場、番所、鉄砲置場、馬坂門などの発見につとめた。こうした当初の目的以外に、予想外の発見のものもあった。これら三の丸地域で確認された遺構と、関連して、前年度明らかにした馬坂の側溝と馬坂西側石垣(仮称)の延長部、寺町御門付近の外堀の状況についても併せて若干紹介しておいた。

以下、各遺構毎にその概要を述べていくことにする。

1. 外堀

福山城の堀は、それ以前の福山館の時代にあった空堀を廃して、新城築城に併せて水堀に新たに造ったものである。『御新築綱要調』によれば、「堀廻 三千五百七拾老坪式分八厘八毛四糸式惣」の面積を有していたという。幾つかの縄張図等では内堀と外堀があり、内堀は本丸表御殿の東側にあり、外堀は城背後の寺町とを区画するように設けられ、西側の湯殿沢に沿って延び、更に南側に延びている。東側は、地形的な関係からか設けられてはいない。

内堀は、既に遺構確認調査の結果をもとに復元工事が終了しているところである。外堀については平成元年度以来、町道整備事業の事前調査として寺町側を部分的に調査し、その規模、構造等を明らかにしてきたところである。この調査では、松前神社裏手では堀幅一間程度であり、堀の石垣の遺存状況がまちまちであることが分かっている。同神社裏では、外堀に水が入って来る樋門（蛇口）の位置が確認できている。

昨年度は前述のように、町道馬門坂線の下部にも外堀の一部が埋もれていることを確かめている。この調査では外堀の北東側の隅が明らかにでき、延長約33mの間の外堀の石垣の状況が確認できたのである。今年度は昨年度に引きつづき外堀の延長を追い、その規模、構造、外堀に伴う諸施設の発見に務めたのである。その結果、今年度は約101m間を明らかにできた。

外堀終端部と中仕切り部（いずれも仮称）については別に述べることにし、ここでは明らかになった外堀の概要を記しておきたい。北東隅から東側については昨年度の調査で明らかにしてあるのでここでは特に述べないこととし、南側部分について記しておく。

外堀は北東隅を基準にすると南西方向へ延びており、北東隅から21.5mの地点で西へ約11°の角度で折れ、更に36m延びた地点で約23°の角度で東側に折れている。（いずれも二の丸側石垣基部での計測値）今年度は、ここから18m先まで明らかにしてある。堀の幅は中仕切り部を境にして見ると、その北側では約2.7m（堀底での計測値、以下同）、南側では3m程度から徐々に広くなり、今年度調査終了したあたりになると3.6m位にまで広がっている。

堀は岩盤を削り抜いて造っており、最下部の間知石は溝を掘って据えられるほか、特別の普請はしていない。堀底のレベルは同一ではなく、堀中央になるにしたがい深くなるほか、基本的には南から北へ緩く傾斜しているものの、中仕切り部を境にして深さが大きく異なっている。同じくこれを境にして石垣の積み方を比較すると、南側では最下部の間知石については特に面取り加工（整形）をしていない。石積も工法としては切り込みはぎ、落し積み（谷積み）であるが、技術的には北側の方がはるかにいいである。つまり、南側では石の咬み合わせが甘く、石垣の隙間が目につくのである。同一時期に完成した堀でありながら、何か技術者集団の違いを感じさせる普請である。

石垣の天端レベルは今後の調査結果を待たなければならないことが多いが、馬坂橋の箇所については後述するようにはば理解することができた。同様に「御鉄砲置所」付近では、当時の生活

SP 45-200

SP 45



1. 赤土
2. 暗オリーブ褐色土(25GY7.5) 暗褐色腐植土
3. 暗褐色土層(25YR5.5)
4. 暗褐色腐植土層(25YR5.5)
5. 暗褐色腐植土層(25YR5.5)
6. 暗褐色土層(25YR5.5)
7. 暗褐色土層(25YR5.5)
8. 暗褐色土層(25YR5.5)
9. カーン層
10. 暗褐色土層(25YR5.5)
11. カーン層
12. 暗褐色土層(25YR5.5)
13. カーン層
14. カーン層
15. カーン層
16. 暗褐色土層(25YR5.5)
17. 暗褐色土層(25YR5.5)
18. カーン層
19. 暗褐色土層(25YR5.5)
20. 暗褐色土層(25YR5.5)
21. 暗褐色土層(25YR5.5)
22. カーン層
23. カーン層
24. カーン層
25. 暗褐色土層(25YR5.5)

26. 暗褐色土層(25YR5.5)
27. 暗褐色土層(25YR5.5)
28. 暗褐色土層(25YR5.5)
29. 暗褐色土層(25YR5.5)
30. 暗褐色土層(25YR5.5)
31. 暗褐色土層(25YR5.5)
32. 暗褐色土層(25YR5.5)
33. 暗褐色土層(25YR5.5)
34. 暗褐色土層(25YR5.5)
35. 暗褐色土層(25YR5.5)
36. 暗褐色土層(25YR5.5)
37. 暗褐色土層(25YR5.5)
38. 暗褐色土層(25YR5.5)
39. 暗褐色土層(25YR5.5)
40. 暗褐色土層(25YR5.5)
41. 暗褐色土層(25YR5.5)
42. 暗褐色土層(25YR5.5)
43. 暗褐色土層(25YR5.5)
44. 暗褐色土層(25YR5.5)
45. 暗褐色土層(25YR5.5)
46. 暗褐色土層(25YR5.5)
47. 暗褐色土層(25YR5.5)
48. 暗褐色土層(25YR5.5)
49. 暗褐色土層(25YR5.5)
50. 暗褐色土層(25YR5.5)
51. 暗褐色土層(25YR5.5)
52. 暗褐色土層(25YR5.5)
53. 暗褐色土層(25YR5.5)
54. 暗褐色土層(25YR5.5)
55. 暗褐色土層(25YR5.5)
56. 暗褐色土層(25YR5.5)
57. 暗褐色土層(25YR5.5)
58. 暗褐色土層(25YR5.5)
59. 暗褐色土層(25YR5.5)
60. 暗褐色土層(25YR5.5)
61. 暗褐色土層(25YR5.5)
62. 暗褐色土層(25YR5.5)
63. 暗褐色土層(25YR5.5)
64. 暗褐色土層(25YR5.5)
65. 暗褐色土層(25YR5.5)
66. 暗褐色土層(25YR5.5)
67. 暗褐色土層(25YR5.5)
68. 暗褐色土層(25YR5.5)
69. 暗褐色土層(25YR5.5)
70. 暗褐色土層(25YR5.5)
71. 暗褐色土層(25YR5.5)
72. 暗褐色土層(25YR5.5)
73. 暗褐色土層(25YR5.5)
74. 暗褐色土層(25YR5.5)
75. 暗褐色土層(25YR5.5)
76. 暗褐色土層(25YR5.5)
77. 暗褐色土層(25YR5.5)
78. 暗褐色土層(25YR5.5)
79. 暗褐色土層(25YR5.5)
80. 暗褐色土層(25YR5.5)
81. 暗褐色土層(25YR5.5)
82. 暗褐色土層(25YR5.5)
83. 暗褐色土層(25YR5.5)
84. 暗褐色土層(25YR5.5)
85. 暗褐色土層(25YR5.5)
86. 暗褐色土層(25YR5.5)
87. 暗褐色土層(25YR5.5)
88. 暗褐色土層(25YR5.5)
89. 暗褐色土層(25YR5.5)
90. 暗褐色土層(25YR5.5)
91. 暗褐色土層(25YR5.5)
92. 暗褐色土層(25YR5.5)
93. 暗褐色土層(25YR5.5)
94. 暗褐色土層(25YR5.5)
95. 暗褐色土層(25YR5.5)
96. 暗褐色土層(25YR5.5)
97. 暗褐色土層(25YR5.5)
98. 暗褐色土層(25YR5.5)
99. 暗褐色土層(25YR5.5)
100. 暗褐色土層(25YR5.5)

SP 45-200

SP 45



1. カーン
2. 砂利、カーボン、砂石混、暗褐色土
3. 砂利混、暗褐色土(4.5Y7)
4. グリーンアパ(25YR5.5)、カーボン(25YR5.5)、暗褐色土
5. カーン
6. 暗褐色土層(25YR5.5)
7. カーン
8. カーン
9. 暗褐色土層(25YR5.5)
10. 暗褐色土層(25YR5.5)
11. 暗褐色土層(25YR5.5)
12. カーン
13. 暗褐色土層(25YR5.5)
14. カーン
15. 暗褐色土層(25YR5.5)
16. 暗褐色土層(25YR5.5)
17. 暗褐色土層(25YR5.5)
18. 暗褐色土層(25YR5.5)
19. 暗褐色土層(25YR5.5)
20. カーン

21. カーン
22. カーン
23. カーン
24. カーン
25. カーン
26. カーン
27. カーン
28. カーン
29. カーン
30. カーン
31. カーン
32. カーン
33. カーン
34. カーン
35. カーン
36. カーン
37. カーン
38. カーン
39. カーン
40. カーン
41. カーン
42. カーン
43. カーン
44. カーン
45. カーン
46. カーン
47. カーン
48. カーン
49. カーン
50. カーン
51. カーン
52. カーン
53. カーン
54. カーン
55. カーン
56. カーン
57. カーン
58. カーン
59. カーン
60. カーン
61. カーン
62. カーン
63. カーン
64. カーン
65. カーン
66. カーン
67. カーン
68. カーン
69. カーン
70. カーン
71. カーン
72. カーン
73. カーン
74. カーン
75. カーン
76. カーン
77. カーン
78. カーン
79. カーン
80. カーン
81. カーン
82. カーン
83. カーン
84. カーン
85. カーン
86. カーン
87. カーン
88. カーン
89. カーン
90. カーン
91. カーン
92. カーン
93. カーン
94. カーン
95. カーン
96. カーン
97. カーン
98. カーン
99. カーン
100. カーン

第5図 外堀実測図(1)

面レベルが15.90mにあり、石垣の天端レベルもこのあたりとみられる。二の丸側の石垣天端レベルについては、明年度以降の調査結果を待ちたい。

「福山城見分図」（北大北方資料室蔵）では、外堀についても寸法が入っているが、これによれば北東側の隅から「九間ヨ」、橋が「貳間四尺」につづいて「八間ヨ」とあり、おそらく前述の約23°で折れる地点までが「拾貳間一尺ヨ」と記載されている。堀のような場合、どの部分を基準として計測するものかその位置が分らないが、ともあれ合計29間一尺余（57.3m余）であるという。発掘調査の結果では57.5mという数値（石垣の二の丸側の基底部）を得ている。見分図に示された数値とはほぼ一致するのである。ただし、橋の付近での堀の折れる方向の表現は実際と逆向きであり、細かな点では参考するにあたってはかなりの注意は必要であるとみられる。

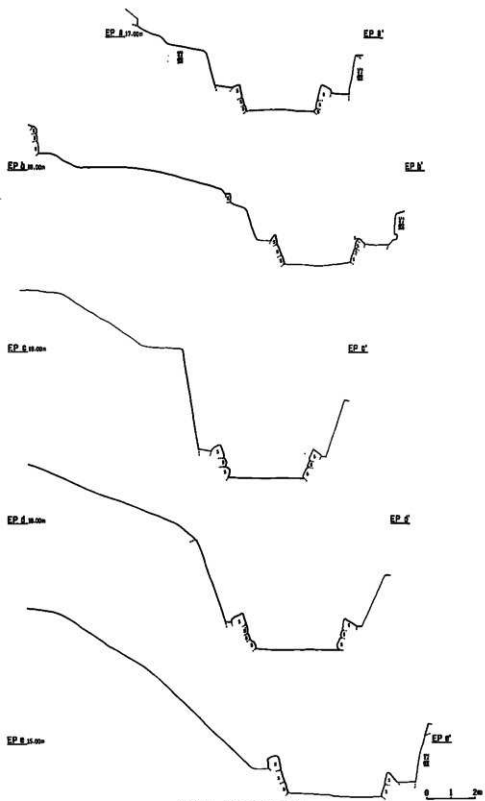
土層図は2ヶ所示しておいたが、外堀の取り壊し時には底から約50cm程の厚さで泥が堆積していたようである。この事実がある意味では幸いして、石垣の全てが抜き取られなかった要因であろう。埋めもどし、整地の状況を見ると、石垣を抜いた後、三の丸、二の丸側の土砂を大きく崩しているが、このことは、この丸側の土塀の基壇なども完全に破壊していることを意味しているのかもしれない。なお、SPa-a'ラインでは、取り壊しが終了した後に、更に大量の緑色凝灰岩砕石が被っている。これは大正10年に、松前勝廣子爵が三本松周辺で大々的に埋藏金捜しをしたことがあり、かなり深い鑿穴を掘ったと言われている。おそらく、この時に掘り上げた砕石の一部が捨てられたものとみられる。

1) 外堀終端部

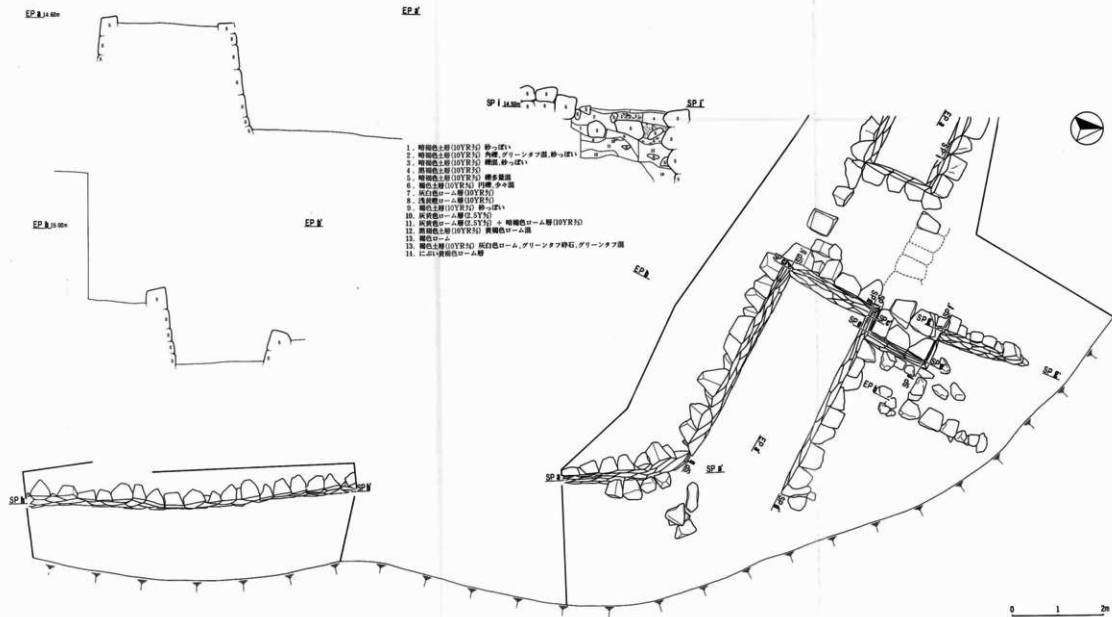
外堀の水は前述した松前神社々務所裏手から引かれ、一方は阿吽寺方向へ、もう一方は龍雲院前から湯殿沢に沿って南側正面へ導かれていた。このほか、法源寺前あたりから石垣の下を潜って「御池」（現松前神社本殿）に溜められ、その後内堀へ導かれていたようである。堀の余り水は、阿吽寺の前から大松前川に、また、馬坂門の東側からも大松前川に落とされていたと考えてきた。この余り水を大松前川に落とす部分を外堀終端部と仮称しておくことにしたい。

市立函館図書館所蔵の「松前福山城図」や松前神社所蔵の「福山城図」には外堀終端部について何らの描写がなく、今まで不明のままであった。町道馬坂線の中途から、大松前川に向かって崖が大きく削られた箇所があって、漠然とではあるが、この削られた部分が外堀終端部ではないかと考えていたのである。しかし、昨年度の調査で、外堀北東側の隅から南東側へ約19mの地点で、外堀が一たん閉じられていることが分かったのである。この閉じられている位置と、前述の崖が削られている部分とは大きくズレており、後者は外堀とは無関係の、明治以降に設定された町道馬坂線の道路排水や民家の生活排水によって削られたものと結論づけざるを得ないのである。

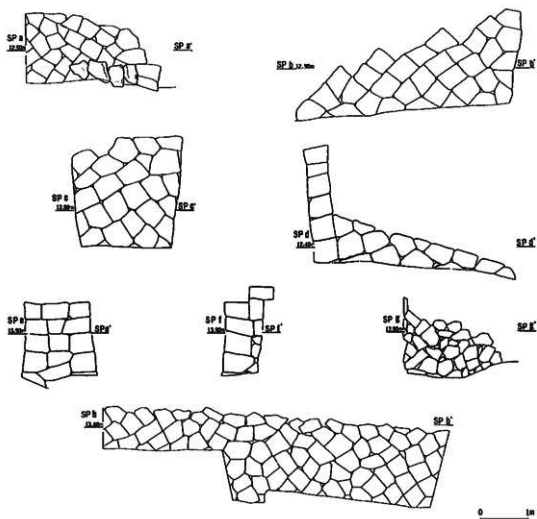
一方、「福山城見分図」によれば、外堀の水は真直ぐに大松前川に落ちるように描かれ、同様の表現方法のものに「福山城図」（元治元年、国立文庫蔵）があった。これを手がかりとして、先ず昨年度確認しておいた外堀の閉じられた部分の石垣を明らかにし、その延長上の調査を進め



第6圖 外堰実測圖 (2)



第7図 外堀終端部・東部石塚実測図(1)



第8圖 外堀終端部・東部石垣実測圖(2)

ることとした。その結果、約2.7m（9尺）先に新たな石垣が発見された。この石垣積は水路状をなし、「福山城見分図」に表わされた「巾六尺」にほぼ一致する幅を有するものである。つまり、水路の最下部では石垣の間隔が約185cmであり、ほぼ6尺の数値である。この水路は思いの外深く、しっかりした石垣積みであり、東面する石垣は最下部からの高さは約2.3mに達する。向かって左側は少なくとも石が2個は抜かれているらしいが、石垣の天端レベルは本来14.45mあたりとみられ、外堀の閉じられた部分（塞き止め部）とのレベル差は約15cm程である。塞き止められた堀の水の、溢れた分だけがこの水路へ導かれ、崖下の大松前川へと排水されたものである。塞き止め部を設けた目的は、こうしたものを設けていなければ、外堀の水は水路を通して一気に流れ出していまい、水堀としての用をなさなくなってしまうことになる。したがって、水堀として一定の水位を保つため、堀の堀たる目的と景観上の目的をも意識してのこととみられる。

水路南側へ積まれた石垣は、外堀の延長ラインよりは幅広く、南へ寄って積み上げられている。やはり落し積みでしっかりと組まれているが、かなり抜き取られている。石垣がどの程度の高さまで積まれていたか、攪乱があまりにも激しくて全く分からない。この石垣積みは南東側へ約4.8mつづき、125°の角度で南へ折れて更につづいている。南側へつづいている石垣については、東部石垣として別に述べておいたので参照していただきたい。

一方、北東側についてはやや複雑な様相を呈している。まず、水路部分の石垣は延長約3.7mにわたって積まれているが、低く、西側の最も高い部分でも基盤から約1mである。石垣の天端は揃い、約16°ほどの傾斜で大松前川に向かって低くなっていく。これだけの石垣積があれば水路としての機能は十分と思われるが、塞き止め部分の右（北）側に石垣積の張り出し部がある。この部分は南北約1.5mで、東西は50cm程度である。しかも2段構造になっており、低い方のレベルは14.55mあたりである。高い方は更にこれに1石加えた程度となり、石は2個残っており天端は揃っていた。更にこの張り出し部の北側、水路の東面する石垣の延長ライン上に、約2mの間に石垣が残っていた。この石垣積みは、延長ラインでは一致するものの、図でも分かるように非常に粗雑な積み方で、小振りの間知石と自然石の混じったものである。しかも、裏込めの状況もしっかりしていないようである。何らかの理由によって本来の石垣が崩壊し、後になって応急的に修理したものではないかと考えられた。稚拙な積み方から、素人の手によるもので、年代的にも新しいものであろう。

塞き止め部は、前述のように石垣の天端レベルの差は約15cmであった。両側（北側と南側）には石が残っておらず、頭の見えていたものは南側に一石あったのみである。北側については、前述した張り出し部の2段になっていた石垣の高い方のレベルが14.90mであった。後述するが、旧馬坂の道路面（北側）の石垣天端レベルもこれに近い数値が予想されてくる。その差は30cm程度であり、ちょうど張り出し部に、更にもう1石積み上げた程度の高さに相当する。塞き止め部の馬坂側には石垣を抜いた痕跡が見え、復元には2段の積み上げが必要となるであろう。

馬坂側の石垣延長線に沿ってSPI-Ⅰラインを入れてみた。その結果は図示のとおりであるが、

下部には特に外堀の延長にしたがって石垣が積まれた形跡はない。つまり、当初から上述の水路の部分も含めて石垣が積まれたのではなく、外堀と水路は計算のうえ別々に普請されたとみることができる。なお、石垣抜取痕の背後は、灰黄色のロームがギッシリと詰まっていた。本来であれば栗石が裏込めとなるが、漏水防止のためにこのような工法を採ったものであろう。このロームの裏込めは、外堀側及び南側の石垣を抜いた部分にも顕著に見ることができる。塞き止めの部南側には僅に石が1箇だけ残っていた。若干掘り下げて下部の石垣の状況を確かめてみたが、ほぼ外堀の延長ライン上に乗るように石垣が組まれているようである。上述したように、やはりこの部分でも裏込めには栗石ではなくロームを用いている。南側がどの程度の高さまで石垣が積まれていたか不明であるが、水路部分と同様に、少なくとも現地表面程度のレベルにまでは積まれていたのではあるまいか。水路からつづく座面は、調査着手前の様子では削られたような形跡は全く観察できなかった。調査後もこの状況は変わらず、このことは外堀から流れ出る水は大量のものではなく、季節的なものか、雨の後に増水したような場合以外は、少量の水が溢れ出した程度だったのではあるまいか。

なお、水路部分を含めた周辺部から大量の遺物が出土している。図示した遺物のほとんどはこの区域からの出土であった。福山城の取り壊して水路部分を埋める際に捨てられたものと、料亭忘帰楼でもこの周辺部をゴミ穴として掘り込み、多量に捨てたようである。

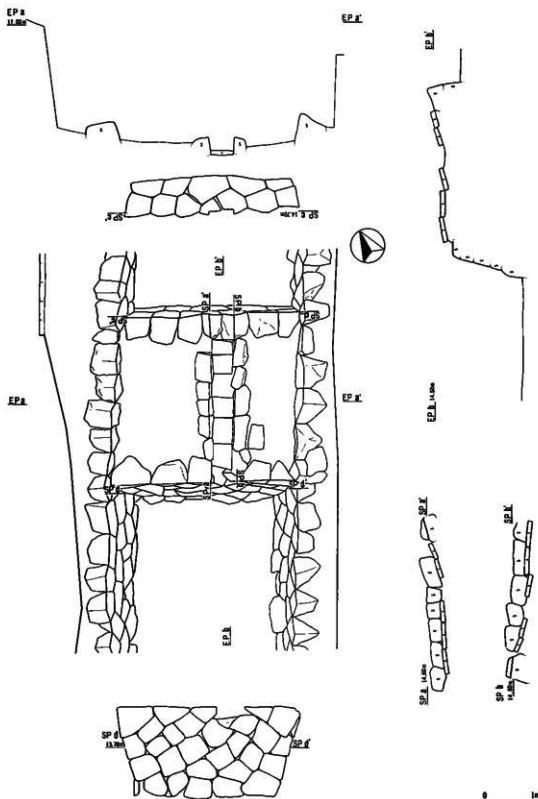
2) 中仕切り部

調査を進めていく過程の中で、SD-7・8区、SE-7・8区から外堀を一たん仕切ってある箇所が発見された。適当な名称がないので「中仕切り部」と仮称しておくことにしたい。縄張り図には堀の内部にこうした表現してあるものは1例もなく、予想外の発見であった。

この中仕切り部は3.6m(2間)弱の幅をもち、石垣が積み上げられ、中央よりやや東側に寄って石垣が積み上げられ、中央よりやや東側に寄って石組の水路が設けられているものである。中仕切り部の北側は2段の石垣であり南側は4～5段の石垣である。つまり、堀底から石垣天端までの高さは北側では約85cm、南側では約195cmである。北側の堀底のレベルは13.94m、南側では12.64mとレベル差は1.3mあり、南側が著しく深いことになる。こうした堀底のあり方を見ると、堀を完成させた後にこの中仕切り部を造ったのではなく、当初から計画的に設けたものである。

双方とも石垣の天端はほぼ揃っており、北側は14.80m弱、南側は14.55m程度である。北側が南側より25cm程度高い。水路部分は石が若干抜かれているものがあるが、袖(脇)石と敷石からなっており、蓋石のあったような様子は窺えない。敷石は何らかの理由によってかなり動いているようで、直接の参考にはならないかもしれないが、北側の石垣の挟り込みや、最も南側の敷石レベルを計測して40cm近く南側が低い。

さて、中仕切り部を設けた意味、また、あえて中仕切り部の北と南側で石垣の天端レベルを変えてある意味が何であるか、推測を混えて若干記しておきたい。外堀の水は、三の丸では前述し



第9図 外堀中仕切部実測図

た外堀終端部から大松前川へ排水されていたが、このほか城内での生活排水や雨水等も何らかの方法で外堀へと導かれていたとみられる。そうしたものの一つとして、昨年度に現可道馬坂線の下部から発見された排水路も該当しよう。また、縄張り図等には表現されていないが、内堀の余り水も何らかの方法で外堀へ導かれていたであろう。これらの水が外堀へ蓄えられ、余った分が大松前川へ排水されていたわけである。これまで調査した中で、外堀（三の丸部分に限定して）は岩盤を削り抜いて石垣を積み上げている部分が多い。外堀の北東コーナー部から南側は、三の丸（東）側は天端近くまで岩盤を掘り抜いているのである。これに対し、前述した外堀終端部近くではもともと自然に傾斜していく地形の中に、新たに土地を拡張する形で三の丸を造成している。つまり、三の丸部分に限って見ると、西側を大きく削って、その土で東（崖）側を土盛りすることによって土地を造成し、三の丸の必要面積を確保しているようである。こうした地形的な制約の下で外堀を造らざるを得なかったようである。前述の塞き止め部では、外堀は岩盤を掘り抜いてではなく、基盤のローム層を掘って造られているのである。しかも天端近くでは盛土層の中に石垣が組まれている。こうした条件の下にあるため、石垣の裏込めが栗石ではなく、漏水防止の目的で粘土を用いるのであろう。

塞き止め部の北側では、65cm以上の深さまで水が溜まると塞き止め部から水が溢れ出るようになる。土木工学には全くの素人であるが、こうした中仕切り部を設けない場合、塞き止め部にかかる水圧はどの程度のものであろうか。季節的な水量の変化、流水の速度によっても異なるかもしれないが、中仕切り部を設けることによって水圧を緩和するという目的があったのではあるまいか。

これ以外に考えられる目的として、堀全体にある一定の水位を保つためではないかということである。元来、三の丸地域は海岸段丘の低位段丘に相当し、新城築城に伴って新たに造成した地域である。この地域についてはほとんど未調査のため、福山城時代の生活レベルを把握しておらず、また、地形もかなり改変されており、あくまで推測の域を出ないが、西から東へ向かって当時の生活面レベルが緩やかに傾斜しているとするならば、水堀としての機能と目的を保つため、つまり一定の水位を保つために堀の中にあえて仕切りを設けたのではあるまいか。外堀の全面的な調査をしてみなければ結論は出し得ないが、推測が当たっているとするならば、三の丸側の外堀にはまだ何ヶ所か中仕切り部が存在する可能性は大であろう。調査段階ではどういう意味をもつものか気がつかなかったが、平成元年度調査した松前神社裏手の外堀（調査地点D）にも類似する施設があった。調査地区の制約があって全容を明らかにできなかったが、間知石による4段の石垣があり、天端がほぼ揃っていたものである。この部分は、外堀が直角に折れて、やがて龍雲院の前から大きな落差をもって月琴堀へと水が落ちる地点に近い。この施設は堀の水が一気に流れ出るのを防止するため、つまり堀の水位を一定に保つための目的をもったものと考えられる。

以上のように、中仕切り部を設けた意味は終端部への水圧を緩和することと、水位を保つための二つの点から推測を試みたのである。

既に見たように仕切り部北側の石垣（水路部分）天端レベルと、塞き止め部のそれぞれとでは後者が低い。したがって、北から南へと水路部分が傾斜しているからとしても、堀の水が南へ流れることはなく、大松前川へと導かれてしまうのである。こうしたことが分かっているが、何故にあえて傾斜した水路を設けているのであろうか。結論は、類似施設の発見を待って出すこととしたい。ただ、予想されることとしては、中仕切り部を水平としておくことは、北側から南側へ傾斜させておく方が剥出しの乾燥した状態になることが避けられ、いささかなりとも水を被る状態が保てるわけである。案外、こうしたことに意味があるのかもしれない。

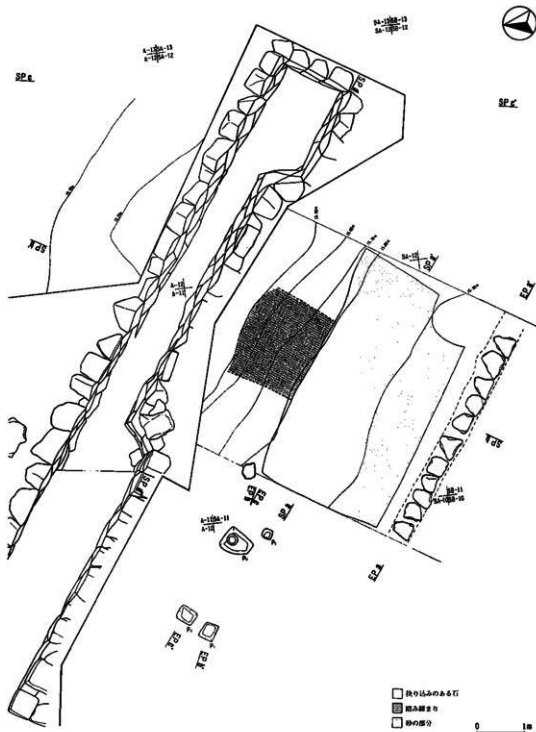
2. 馬 坂 門

『御新坂縄張図』によれば、福山城には櫓門が3ヶ所と11ヶ所の平門があったとされている。櫓門は全て銅葺で、平門は全て瓦葺であったという。このうち、馬坂を登って来ると外堀に突き当たり、外堀に架かる橋を渡って最初に潜るのが馬坂門である。馬坂門の姿図を描いたものは2例あるが、明治26年に描かれた「福山城図」、年代不詳の「松前城図」では、いずれも薬匠門か高麗門らしく表現されている。他の縄張図で馬坂門の位置を示しているものでは、本柱が2本と控柱が2本に表現されている。門の規模を示したものが1例あり、「福山城見分図」では「二間四尺」としてある。門の左右には櫓垣が設けられ、同図では左右とも「三間ヨ」と記載されている。こうした記載を手がかりとして発掘調査を進めたのである。

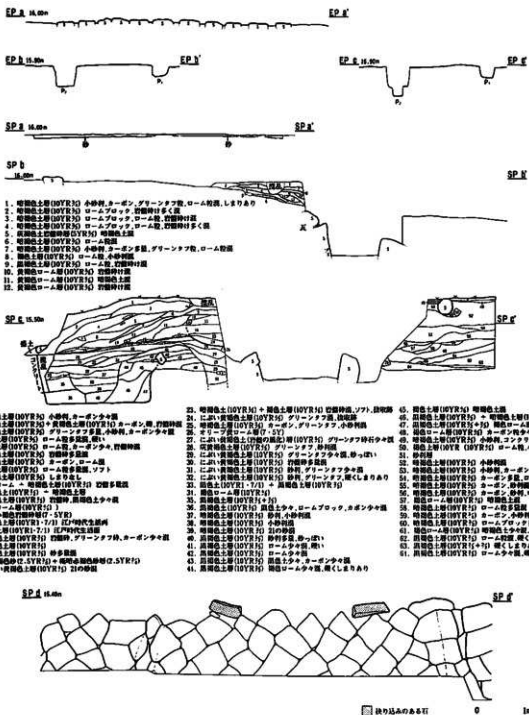
調査の手順としては、先ず昨年度に明らかにしていた外堀に架かる橋の位置を再確認し当時の通路のレベルを明確にすることにした。馬坂側の方は、舗装工事や側溝のトラフ埋設等によってかなり攪乱されていたが、A-12区で一部確認することができた。土層図を示しておいたが、福山館時代の生活面に更に20cm程度の盛土しており、長い間の踏み締まりによって堅くなっていた状態が確かめられた。また、外堀を普請した時のものとみられる細かな緑色凝灰岩の碎石層が薄く堆積していた。通路面は、外堀に対して水平になるのではなく、約10°位の緩い傾斜であることが分かった。通路面と、橋が架かっていたとみられる外堀の括れている部分では、レベル差を検討すると、石垣はせいぜい1石程度しか抜かれていないと判断された。

一方、三の丸側の石垣については、地表からかなり深い位置にあったものの、馬坂側と同様にやはり1石程度しか抜き取られていないと考えられた。石垣の抜き取りによって攪乱を受けた部分の土砂を除き、旧生活面の観察に務めたところ、意外に深いレベルにあることが明らかにできた。旧生活面（通路面）には薄く砂が堆積しており、この砂の下部は堅く締まって容易に識別することができた。しかも、この堅く踏み締められていた部分は幅約2m程度であり、12~15°位で緩く立ち上がり、石垣張り出し部のほぼ中央に位置していた。この堅く締まった部分はやがて消失し、門の礎石、地覆石、敷石等は発見されなかったが、代わって4~8cm位に薄く砂の堆積している部分が発見された。図示したスクリーントーンの部分がそれである。一部攪乱を受けていたものの、5.3m×2.8mの長方形の範囲にはほぼ限定されていた。外堀の張り出し部や踏み締まり部分にはほぼ対応する位置関係を示していた。更にA-12区、SA-12区から、図示したような緑色凝灰岩の11個の間知石が発見されている。間知石は一直線に、天端はほぼ同一レベルに揃えられていた。

以上のように、踏み締まり部分、砂の範囲、石列、加えて、櫓木の抜き取り痕とみられるP₂、P₃の位置を勘案すると、ほぼ馬坂門の位置が確定できそうである。馬坂門は、橋を渡って若干傾斜する道路を登った平坦面に建てられていたらしい。砂が敷かれていた範囲には、おそらく敷石や束石が置かれていたものであろう。砂を敷く意味は、現代の土木工事でも行われるように不



第10図 馬坂門、馬坂橋実測図(1)



第11図 馬坂門、馬坂橋実測図 (2)

陸調整のためと思われる。

縄張図に表現された櫓の位置を示すとみられるビットは、擾乱が激しいため4ヶ所しか発見できなかった。位置関係から、このうちの P_2 、 P_3 が櫓列に関係するビットとみられる。 P_2 、 P_3 は柱間がほぼ一間であり、外堀と平行した位置にあるからである。馬坂門と櫓との関係を示している縄張図は4枚あり、このいずれもが外堀と平行して一直線であると表現されている。これらの描写が正しいとするならば、 P_3 、 P_2 を延長した線上に馬坂門の礎石が位置することになる。

3. 橋

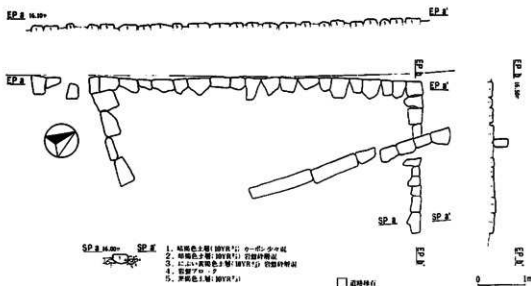
縄張図等では、外堀には4ヶ所の橋が架かっていたことになる。大手、寺町御門の前、三本松（羽休の松）前、馬坂門の前の4ヶ所である。今年度調査区内には、このうち後二者が存在していたことになっている。これらの橋が具体的にどのような名称で呼ばれていたものがまだ史料等に見えてこないが、ここでは仮りの名称として後二者について次のようなしておきたい。即ち、三本松前の橋については大手に対し搦手の橋（搦手橋）、馬坂門の前については馬坂橋の名を与えておきたい。

彩色で描かれた2枚の図（『福山城分見図』と元治元年の『福山城図』）では、橋の表現方法に2通りあることに気づく。つまり、大手と搦手のものは黄色もしくは茶色で木橋風に、寺町と馬坂のそれは灰色で、しかも板（？）目の幅が広く表現されている。参考までに、内堀に架かる橋も前者と同様の表現方法である。つまりこの違いは、橋の長さ、規模とみるよりは、橋の素材の違いによるものと考えられ、前者は木橋で後者は石橋ではないかと思われるのである。なお、前二者については、今村三峯筆による「松前風景図」でも木橋として描写されている。

馬坂橋については「松前福山城図」や「福山城分見図」で示されるように、外堀三の丸側の張り出ししている部分が橋の位置である。発掘調査の結果では、図示したとおり張り出し部が発見されている。しかも、前述のとおり馬坂門との対応関係もうまく合致しそうである。福山城存続期の路壁レベルは、馬坂側では15.30mあたり、馬坂門側ではこれより若干高く15.45m付近に求められそうである。石の厚さにもよるであろうが、橋の夫々の天端レベルもそのあたりに求められはしないであろうか。

橋の幅は特に数値を記載しているものはなく、馬坂門と同程度に表現してあるもの、門よりは狭く描いてあるものがあり、仲々手がかりとはなりにくい。ただ、外堀張り出し部が石垣の天端で5.4m（3間）であり、橋の幅がこれより広くなることはないであろう。なお、馬坂門側の石垣の最上部に、約3.6mの間の間隔をおいて長さ60～70cm、幅20cm大で、L字形を呈する緑色凝灰岩が2個発見されている。（スクリーントーンで表示部分）、この形状からして、おそらく橋板を受けるためのものであろう。

搦手橋については、今年度の調査では何らの手がかりは得ていない。「福山城分見図」では前述したように2間4尺の数値が示されていた。長さか幅のことか判断つきかねるが幅と解釈した



第12図 御鉄砲置所実測図

方が記載された間数と調査結果がほぼ一致することは前述のとおりである。

橋の位置については、同図では外堀の北東隅から「九間ヨ」の位置に架けられているとされる。また、外堀の若干折れ曲がっている位置に架かるように描かれている。だが、発掘調査の結果では、この折れ曲がる部分までの実際の数値は約21.5mであり、9間余（約16.2m）とは大きくかけはなれていることになる。今年度の調査結果と絵図等からは、以上のように何ら結論は出し得えない。来年度はこの橋が架かった部分を含め二の丸地域を調査予定であり、その結果を得て改めて検討を加えてみることにしたい。

4. 御鉄砲置所

縄張図等では「御鉄砲置所」「鉄砲置場」と表現されている建物である。これらの図では建物は馬坂門の南側の登城口、天神坂門を潜ると真正面に見える位置に建てられていたと表わされている。

建物の推定地は町道登城坂線及び外濠1号線の下部とみられ、かなり破壊されていると予想された。調査の結果、図示したように外堀に沿って鋸形に布石が発見されている。縄張図に示されたとおり外堀側の短辺は3.2m間に布石が残されていた。布石は大きなものでも30×40cm大で扁平なものを選んでおり、石質は緑色凝灰岩である。採取痕を東側、南側で追ってみたが、攪乱のため確かめられなかった。

3種類の縄張図を比較しても、具体的に建物の規模は見えてこない。ただ、これらの縄張図では、いずれも長大な建物として描かれている。例えば「松前福山城図」では短辺と長辺の比が1：2.75、松前神社の縄張図では1：2.5、「福山城見分図」では1：3程度と表現されている。調査

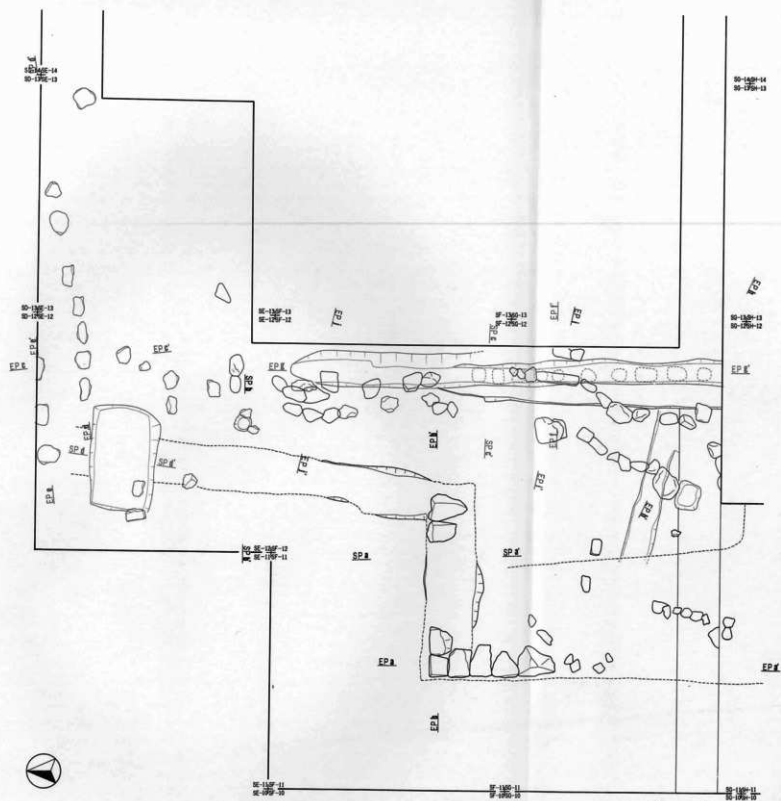
によって短辺は3.2mまで確認されているから、抜取りを考慮して本来2間であったとすると、長辺は5間、5間半、6間のいずれかと想像される。

5. 御 番 所

御鉄砲置所と同様、縄張り図によっては御番所あるいは番所と称された建物である。御鉄砲置所に向かって右側、搦手橋の左側に位置する建物である。この建物の機能としては、馬坂門、天神坂門、御鉄砲置所を守る番士の詰所的な目的をもつものであろう。

慶応3年、箱館の写真師木津幸吉、田本研三両名の撮影した写真がある。東側の法華寺台地から天神坂門を中心に据えて撮影したものであるが、天神坂門の右側に切妻屋根の平屋の建物が見えている。位置関係からして、この建物が御番所であろう。

御番所の位置を確認することは、搦手橋の位置を確定するという意味からも重要であるが、調査をしても何らかの手がかりは得られなかった。その理由としては、この建物のあったとみられる箇所は、表土層を取り除くと15cm足らずで岩盤層に達してしまい、福山城存続期の生活面そのものが大きく攪乱されていたことによる。そのため、布石あるいは東石の抜き取り痕すらも確認できなかったのである。



第13图 七香御台付近実測图(1)

6. 七番御台場

縄張図等によれば、三の丸崖上には正面馬出口左手に一番、二番、右手に天神坂口までの間に三番～六番、天神坂口の右手に七番台場が築かれていた。このうち、今回の調査対象としたのが六番と七番台場であるが、六番台場については日程の関係で途中で断念している。史料によれば、七番台場には三貫目軽煩(砲)を配していたという。

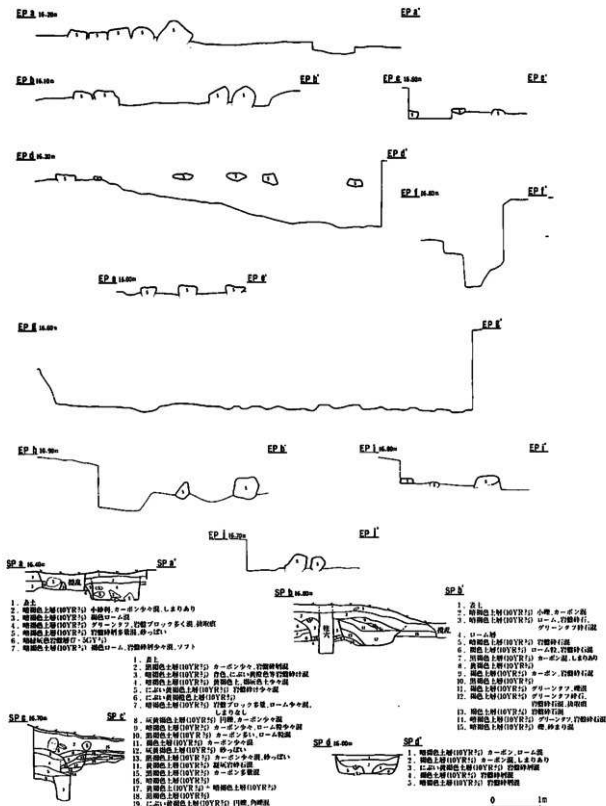
台場の位置については、各縄張図ともほぼ同様の場所に示されており特に問題はない。だが、台場の構造を示すとみられるその表現方法は各縄張図によってまちまちである。今、6枚の縄張図を比較してみると、全てのものに共通しているのは三の丸崖際には土手が描かれていることである。三の丸崖際には土手の名残りがいくつか見え、おそらくこの土手の存在は確かで、今年度の調査でも一部確認できている。

台場の表現方法ではこの土手を切って、つまり台場のある箇所だけ土手を切るように表現されているものが2枚ある。いずれも北大北方資料室所蔵で、「松前城図」と「舊福山城之圖」がそれである。他の四枚は土手の内側に、土手に取り付くように表現されている。しかし、「七番御台場」のみをとってみても表現方法は夫々異なっているのである。例えば元治元年の福山城図(陸奥国松福山城旋失所覚)では土手状で、その内部は板敷状に表現されているのである。ただ、同図では規模が示されており、七番台場は東西3間4尺、南北3間5尺の長方形であるという。松前神社と市立図書館図書館の縄張図には規模の記載はないが、石垣積みで、七番御台場には天神坂門側から階段が取り付けられているように表現されているのである。

以上のような縄張図を参考にすると、七番御台場があったと推定される位置は、SF-11区、SG-11区あたりであり、この調査区の東側、崖際は土手状に高まり、後述する土手の名残りとも想像された。調査の結果、表土層直下には明治期以降の民家建築による掘削が甚だしかった。調査区内からは、忘婦楼のものとみられる水路跡が発見されている。明治29年3月刊の『家屋図入北海立志編』によれば、調査区付近は忘婦楼の庭園であったらしく、水路跡もこの庭園に伴うものであろう。また、土手部分が削られて低くなっているのもこうした関係で、高く置かに残っているのは築山にされたことによるものであろう。

道路沿いに桜が植栽されたりして十分な調査が叶わなかったが、SE-11・12区～SH-11・12区にかけて、図示したような遺構が発見されている。このうち、レベル、位置関係等から見て、七番御台場に関係があると思われるのは、SF-11区～SG-11区にかけて発見された石垣の一部とその根掘り跡である。石垣は、最下部の緑色凝灰岩の間知石が8個発見された。面(つら)で50～80cm大の比較的大きなもので、この程度の大きさの石を用いる石垣としては、根掘り跡の規模を勘案して、少なくとも3～4段は積み上げられそうである。

根掘り跡は浅く不鮮明であり、石垣の残っている部分あたりは比較的深くてしっかりしていたものの、SE-12区ではかろうじて確認できた程度である。SG-12区では、土層図を参考にしな



第14図 七番台会場付近実測図(2)

から推定ラインを引いたものである。残存する石垣と根掘り跡から、SF-11区とSF-12区で直角に折れるようである。この数値を計測すると、SF-11区とSF-12区間では根掘り跡は最大に見ても4.2mであり、石垣が積まれた場合、石垣の面での計測値は残存する石垣の関係からして、最大でも3.8m程度である。これに対し、SF-11区からSG-11区にかけての根掘り跡の計測値は7.5m程度にはなりそうである。

前述のように数値の入った縄張図では、東西が3間4尺（約6.6m）、南北3間5尺（約6.9m）であり、調査結果の最大、東西3.8m、南北7.5mとは大きな違いを生じている。南北については推定根掘り跡ラインの数値から大きな矛盾はないとしても、東西ではかなりの違いである。石垣の発見された位置から、七番御台場に伴う石垣の可能性は高い。しかし、規模の点からみると以上のように問題がある。したがって、この遺構が七番御台場に関係があるか否かについては保留としておき、他の一番から六番台場の調査結果を得て結論を出すべきと考える。

7. 土 居

福山城の各所には土居（土塁）が設けられ、縄張図に夫々表現されている。三の丸地域では崖際に沿って、東の馬坂門脇から西の湯殿沢門にかけて土居が築かれていた。明治以降ほとんどが崩れてしまったが、現在その名残りは字松城93・96番地や今年度の調査区で見ることができる。しかし、縄張図での表現方法は様々であり、単に土手状に表現してあるもの、土居の上に松とみられる樹木が描かれているもの、土居のほかに「梁（あづち）」を描き込んであるもの（「松前城図」時期不詳）や土居の外側に石垣積みの表現をしてあるもの（「舊福山城之圖」）などがある。

各建物、施設等の寸法の記載された「福山城見分図」によれば外堀終端部から天神坂口までの間は21間半（38.7m）であり、天神坂口での左右の土居の幅は夫々4間半（8.1m）と8間（14.4m）と示されている。ただし同図で見える限りでは、4間半と8間では倍近い数値であるにもかかわらず、土居の幅はほぼ同じに描かれている。ちなみに天神坂口の幅は3間2尺であり、七番御台場の規模が東西3間4尺、南北3間5尺であるとされ、これらの描写方法からして、「8間」という数値は写し誤りか、台場まで含めた数値かもしれない。

今年度の調査区のうちSE-12区からSH-12区の崖際にかけて徐々に高くなっていた。前述のように、今年度調査区の大部分は明治21年創業忘帰樓の建っていた場所である。今回の調査では、高まりの部分にトレンチを設定してみた。その結果は図示したとおりであるが、これによれば土居には新旧2時期のものがあるらしい。古いものは旧地盤から1m足らずの高さであり、新しいものはこれを大きく嵩上げするように土盛りをして土居を築いているらしい。この土盛りには外堀の掘り上げ土を利用しており、岩盤の碎石を多量に用いている。これは、六番御台場近くでも同様である。

土居図を見る限りでは土居の幅は8m強であり、上述した数値のうち「四間半」という記載が正しいのかもしれない。これに対し、土居の長さ「二拾一間半」という記載では、現天神坂口と

発見された外堀終端部との実際の距離はこうした数値に至らない。計測する場所によって異なるのは当然としても、33～35mが実際の距離であり、かなり不足しているのは事実である。これをどう解釈すべきか外堀終端部の位置は動かしようがないから、天神坂口の位置が本来のものと若干変わっているのか、「福山城見分図」の数値の誤写か今後の課題としておきたい。

8. 東 部 石 垣

適当な名称が見あたらないので東部石垣と仮称しておくことにする。調査前は完全に埋もれており、地表からの観察ではその存在に全く気付かなかったものである。また、幕末ころとみられるいくつかの縄張り図にも描かれてはいない。しかし、明治になって描かれた「福山城絵図」や「舊福山城之圖」には石垣が描かれており、果たしていずれが正しいのか疑問の残っていたところである。外堀終端部の調査を進める過程で、この石垣の存在に気付いたのである。

この石垣は、外堀終端部から南側へ延びるものである。途中、崖際に雑木の太木があり、危険防止のため伐採を止めているがトレンチ等によって14.5m間はつづいていることを確認している。ただし、土居を切ってSG-15区に設定したトレンチには石垣が覆まれていた痕跡は認められない。かつて石垣があって、これが抜き取られるか石垣が崩れたのであれば、抜き痕や裏込めの栗石が残る筈であり、トレンチにはこれが全く認められず、したがって同区までは石垣が達していないことになる。おそらく、SF-15区あたりで途切れてしまうものとみられる。

この石垣の特徴は、石質は変わらないものの、外堀や今年度まで継続して修理している二の丸石垣に比べ小振りである。また、この石垣の高さは、基盤から天端までは1間程度しかないのである。高さの点では昨年度明らかにした馬坂西側石垣（仮称）と同程度であるが、用いる石の大きさは東部石垣の方が小さい。

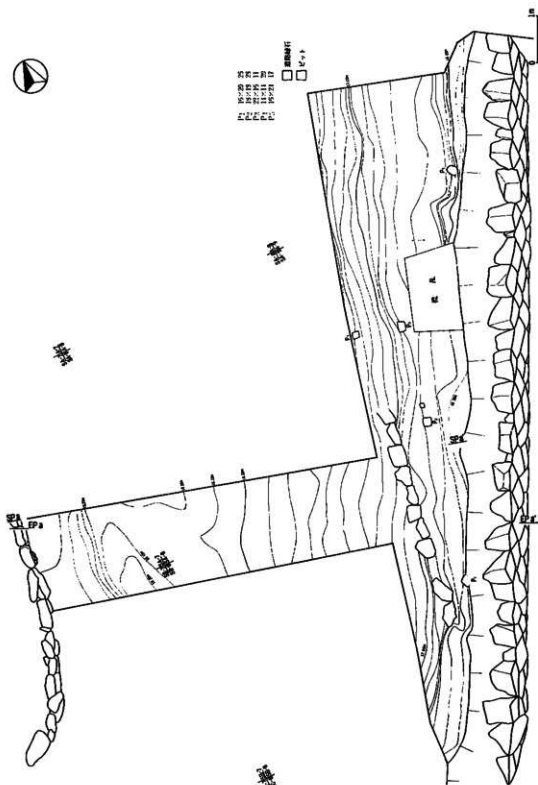
一部埋没状況確認のため掘り下げたが、石垣は岩盤の上に積み上げられているのではなく、盛土を積み固めて覆まれていることが分かった。したがって地盤としては極めて不安定であり、そういう関係もあって高く積み上げていないのかもしれない。ただ、裏込めはしっかりとしており、石の控えから1m以上は川砂利を主体にした栗石が入っている。

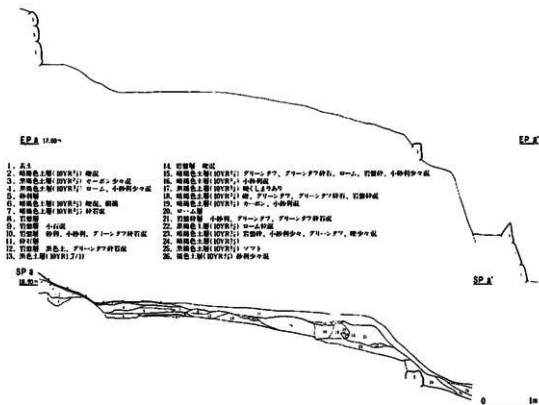
なお、石垣に沿って幅約40cm程度の犬走りが確認できた。この犬走り部分は、緑色凝灰岩の細かな砕石が敷かれており、容易に識別できた。

9. 杭 列

外堀を境に西側、二の丸地域は次年度以降の調査を予定しているが、予備的な意味でSA、SB区について外堀の西側を若干の面積の調査をしてみた。また、SB-7・8区にトレンチを設定してみた。その結果、何本かの杭跡とみられるビットが発見されたので記しておきたい。

杭跡は、整然と並ぶものが4ヶ所発見されている。方形もしくは長方形を呈し、1辺は15～20cm程度でそう大きなものではない。深さは20cm前後である。P₁～P₃は一直線上にあり、P₄はこ





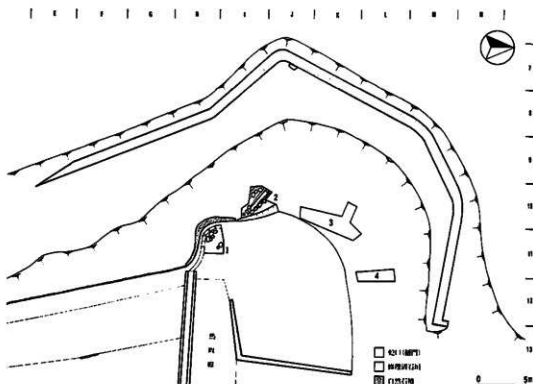
第17図 二の丸側実測図

れに対し直角に折れている。夫々の枕跡の間隔は $P_1 \sim P_2$ が3.5m、 $P_2 \sim P_3$ が2.1m、 $P_3 \sim P_4$ が1.0mであり、尺単位にはうまく合致していない。外堀に対しても平行関係にはなく、むしろ道路(町道外濠1号線)と平行するように見える。したがって、果たしてこの枕跡が古いものかどうか、今後の調査結果を待って判断したい。

トレンチは、現三本松の石垣の部分まで設定してみた。このトレンチ部分は町道部分に相当し、盛土の砂利や碎石を除くと直ぐ基盤の岩盤に達している。岩盤面は外堀方向に向かって緩く傾斜し、一部には小砂利の混る道路面が観察された。この道路面が橋手橋を渡って橋手門に至る福山城期の通路面か、明治期になってからの、新しく設定された道路に相当するのか俄かに判断しがたい。今後の課題としておきたい。

10. 側溝

町道馬坂線の整備工事による事前調査の概要については既に明らかにしてきたところである。馬坂の側溝は調査後に石垣の修復工事も終え、旧状に復してある。一方、昨年度の国庫補助事業の遺構確認調査によって、石垣修復工事予定箇所から樋門が発見されていた。この樋門からは、かつてはかなりの湧水があり、おそらくこの水が馬坂の側溝へと導かれていたものと推定してきたところである。



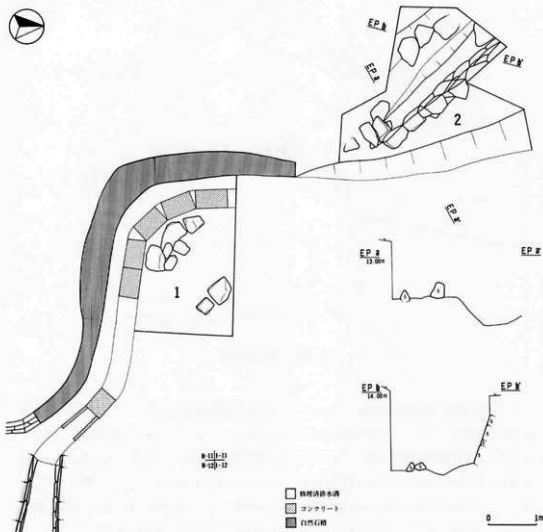
第18図 調査位置図

そこで今年度は字松城104番地-1について、馬坂の側溝の延長を追うこととし、併せて馬坂西側石垣と仮称しておいた石垣の延長についても確かめてみることにした。同番地には昭和43年に道立松前病院看護婦宿舎が建てられ（その後、環境整備に伴って解体）、旧地形はかなり改変されたとみられる地域である。縄張り図では、この地域の表現を省略しているものが多く、また、描いているものでも特に何らかの施設があった様子は窺えない。現状は、崖を崩して馬坂西側石垣につづいてコンクリートで固めた自然石による石垣を組んでおり、側溝の延長部にはU字トラフが入ったままとされている。崖面からは常時水が滲み出ており、美観上からも環境整備を考慮しなければならない地域の一つである。

図示したように4ヶ所のトレンチを設定してみた。調査区1についてはU字トラフがあり、思いのほか浅いことと、上述の石垣のため調査は途中で断念した。調査区内から石が若干の石が発見されたが本来の位置を留めているものではない。おそらく、U字トラフの部分が側溝の延長部ではないかと推定された。

調査区3・4からは特に石垣を組んだ様子は窺えなかった。崖面全体に宿舎建築による攪乱を大きく受けており、宿舎敷地を確保するため崖面はかなり削り取られているようである。

調査区2からは、溝と石垣積みの一部が発見されている。溝は岩盤を浅く掘り込んであり、水



第19図 側溝実測図

が絶えず流れ出ていた。石垣はこの溝に沿って組まれていたが、精巧なしっかりしたものではなく、緑色凝灰岩間知石や自然石を組み合わせた乱雑なもので、旧来の石垣ではないと判断された。崩落によって、応急的に積み上げたような印象すら受けた。しかし溝と上述の樋門との位置関係から、元々この場所に側溝があったものと推定される。

以上のように、石垣と側溝の延長部については大きな手がかりは得られなかったが、およその推定はされ、コンクリート混りの石垣を壊して再調査を試みる必要はあろう。

11. その他の遺構

七番御台場の調査を進める中で、明治期及び福山城以前の遺構がいくつか発見されている。限られた面積の調査であったため、これらはいずれも性格のよく分からないものである。したがって、ここでは一括して紹介しておくことにしたい。なお、このほかA-14区、SB-14区に縄文時代の竪穴住居址が夫々1軒あったが特に述べないことにする。

1) 水路跡 (第13図緑)

SF・SG-12区からの発見である。崖際の高まり(土層)の裾からの発見で、表土を取り除いてやや掘り下げた段階で現われたものである。図示したように自然石による石列が向かい合い、曲線を描くように発見された。内部には薄く泥土が堆積しており、水路として使用されたものと思われる。用いられる石は特に庭石として見栄えのするものではなく、ありふれた自然石であった。前述した『家屋図入北海道志編』では、水路跡の発見された付近は忘帰楼の庭園として描かれており、この庭園に伴う水路跡の可能性が高いと考えておきたい。

2) 不明建物 (第13図赤)

SE-12・13区、SF-12区から20個以上の東石が発見されている。30cm前後の自然石の扁平なものが多く、かなり動かされているようで配列が今一つ明確ではないが、おそらく何かの建物の東石とみられる。発見レベルは現地表から40～50cm下部にあり、福山城解体時より少なくとも20～30cm以上下部にあることから、福山館時代の建物跡であろう。しかし、時期を特定できる遺物は発見されておらず、不明建物としておきたい。

3) 溝跡及びピット (第13図青)

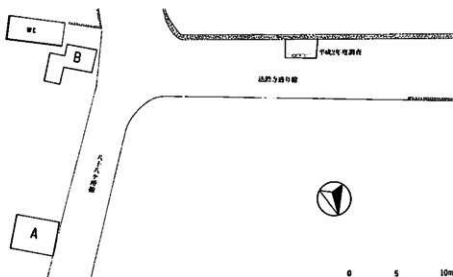
不明建物遺構より更に下部から、長方形のピットと溝状の遺構が発見されている。この両者とも上述した東石群よりは明らかに古いが、同時性をもつかどうかは不明である。ピットは確認面での大きさ220×140cm、深さ40cmであり、長方形に近い。内部から遺物は何ら発見されておらず、性格不明の遺構である。

溝状遺構は幅約50cmで、深さは確認面から約70cm程度である。直線状に約9m延びている。単なる溝ではないようで、この溝には直径30cm未満の樫木が整然と並んでいたらしく、樫木の抜取痕と溝の底が若干凹んでいた様子が観察された。溝の中から遺物は全く発見されなかったが、屋敷の塀の遺構の一部かと思われる。

付. 外堀

町道八十八所線の改良工事の事前調査として2ヶ所のテストピットを開削してあるので、その結果を併せて記しておくことにする。同線のうち、内堀横から公衆トイレ前までは、福山城取り壊し後に設定されたもので、他は旧藩時代の道路をそのまま町道としている。この路線の中で、トイレ前から桜見本園(旧八幡社跡)前までの間が、外堀に沿っているとみられる。

町当局はここ数年来、福山城周辺の町道整備工事を進めており、平成4年度には町道八十八ヶ



第20図 外堀調査位置図

所の一部を計画したものである。これによって、外堀の一部が工事区域にかかるかもしれないという可能性が生じたため、事前に外堀の位置を明らかにし、工事対象部から外しておこうとしたものである。

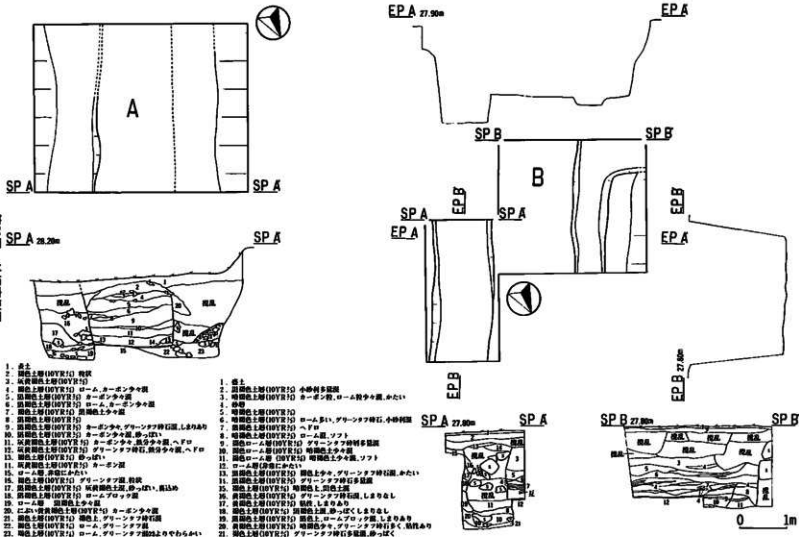
調査地点は第20図のように2ヶ所設定した。もう1ヶ所以上は設定しなかったのであるが、道路に沿って桜が植栽されておりA・B区のみとなった。A区はトイレ前から北側へ約20m寄った地点、B区はトイレ前である。いずれも史跡指定地内である。

A区は4.5×3.5mの範囲のみの調査であったが次のような事実が明らかになった。まず調査区内の石垣は完全に抜き取られていた。B区も同様であり、少なくともA～B区に至る間の石垣は全て抜かれているとみられる。外堀を普請するにあたって、基盤のロームを掘り込んで大きな根掘りをし、石垣を掘える部分のみ深めに溝状にしてある。この工法は、これまで明らかにした外堀や、石垣を高く積み上げる場合と共通しているようである。溝状にする意味の一つは、石垣のせり出しの防止にあらう。

現町道部分の盛土層はそれ程厚いものではなく、道路側での石垣の天端レベルは27.40mあたりに求められそうである。これに対し、本丸側の天端レベルは保留にしておきたい。なお、土層図を見る限りでは、外堀が約1.5mも埋もれた段階で石垣の取り外しが行われ、この段階ではほとんど堀としての機能は失われていたようである。

B区は、縄張図によれば外堀が直角に折れる地点で、本丸側には寺町御門が建っていた場所である。現況ではトイレ、水呑場、消火栓、桜の老木があり、図示したような調査区しか設定できなかった。A区と同様に石垣は完全に抜き取られており、石垣を掘えた部分が溝状に一段低くなっている。この溝は南西側の隅で右（西）へ折れており、縄張図に表現されているように、外堀

第21図 外堀実測図



が西へ折れる部分とみられる。調査範囲で見える限りでは、本丸側の石垣の天端レベルは27.40 m 付近である。

本調査区は上述のように、寺町御門と外堀に架かる橋のあった場所であり、今回の調査範囲内からはこれらの遺構の手がかりは得られなかった。しかし、将来的にはトイレの移設と調査の必要な区域である。

Ⅲ. 出土遺物

調査による出土遺物には陶磁器類、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品、縄文式土器、自然遺物と多岐にわたっている。調査面積が広いこともあって、特に今年度は出土量が多かった。中でも磁器、陶器の出土量は多く、約14,000点弱に達する。出土区は外堀と外堀終端部に集中しており、特に外堀終端部はここを含めた地域に料亭忘帰樓のゴミ穴が何度か掘り込まれたようで、大量の陶磁器その他が出土している。外堀内部からの陶磁器には、裏込めの砂利とともに搬入されたものが多く、角が取れて丸味をおびたものが少なくなかった。また、堀の中からは、図示してはいないが、若干の板材、杭、木片なども発見されている。

以下、遺物の概要を見ていくが、特徴的なものについてのみ記載していくことにしたい。また、陶磁器と金属器は観察表を付しておいたので参照いただきたい。

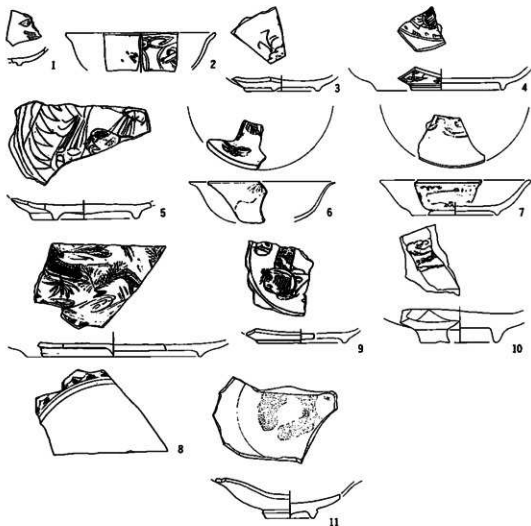
1. 陶磁器

陶器3,870点余、磁器9,980点余の出土である。上述のように、ほとんどが外堀と外堀終端部からの出土である。出土量の割合には古い時期のものが少なかった。三の丸の造成、外堀の普請によって大量の土砂が動き、これとともに古い時期の遺物も散ってしまったためであろう。

産地別では従来のものとはほとんど変わらず、肥前及び肥前系、唐津、備前、関西（京）・瀬戸・美濃、信楽のほか面館焼とみられるものがあった。なお、観察表のうち肥前としてあるものは、肥前及び肥前系を含んでいる。年代別では明代末に代表されるような古いものは少なく、圧倒的に多いのが幕末から明治に至るもの、明治期以降の資料である。これは多分に、忘帰樓によるゴミ穴部分に調査区が設定されたことにもよるものであろう。器種別では碗、皿、鉢子、盃、鉢、徳利、蓋物、香炉、仏飯器、紅皿、土瓶、壺、甕、灯明皿、植木鉢など多岐にわたっている。

1～10は明代末とみられるものである。いずれも小破片で、全体の器形、文様構成の分かるものはない。呉須の発色の良いものは6・8で、他は燻んだ色調を呈するものが多い。ほとんどのものは、高台に砂が熔着している。11は唐津の皿で、砂目積である。この種のものは、今年度は1点だけ目についた。

碗類（蓋を含む）は比較的年代が限定されており、図示したものは幕末から明治にかけてのものが多く、素描きによる絵付のものが多く、時代的な特徴をよく表わしている。明治期の印判手



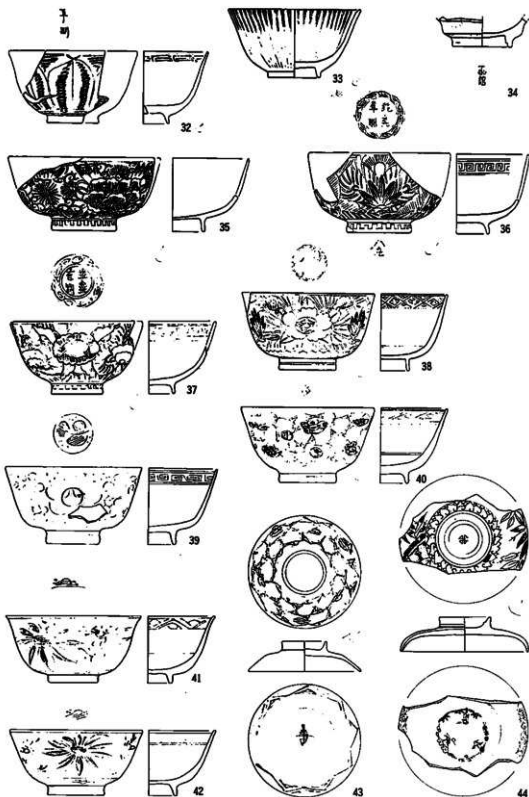
第22図 出土遺物(1)

のものも個体としてまとまった資料が多数あったが、これらは紙数の関係で省略しておいた。こうした中で、コンニャク印判によるもの(16)、広東型のもの(24)、胎土や呉須の発色、文様の特色から清朝の製品とみられるもの(25)がある。34は高台内に「函館」の銘があり、函館焼とみられる。福山城内では初めての出土である。19は2分の1程度の資料で、草花文のほか「函」の文字の見えるものである。胎土の色調は34と同様に燻んだ灰白色を呈し、函館焼の可能性が高い。

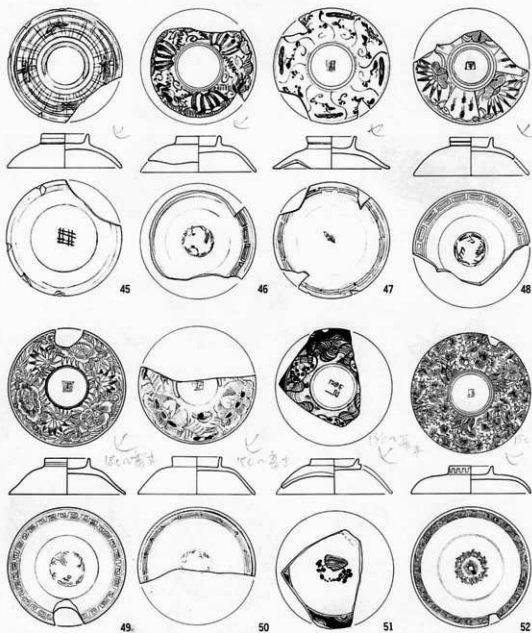
碗類とともに皿類の出土も多い。大小各種あるが、今年度は大型のほぼまとまった資料が2点あった。図示したものは、年代的には幕末から明治期のものが多く、いわゆる中皿、三平皿と称されるタイプのものが目につく。この種のものは、型打ちによって大量に製作されたい。こ



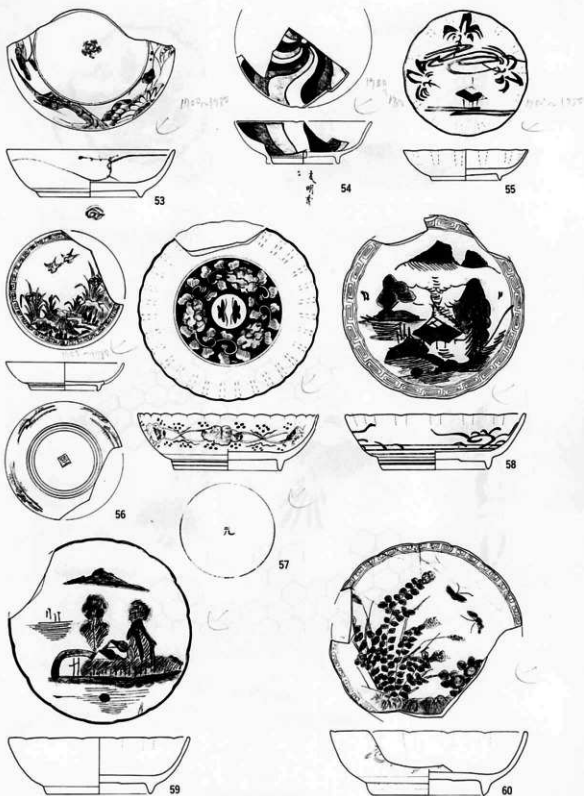
第23图 出土文物(2)



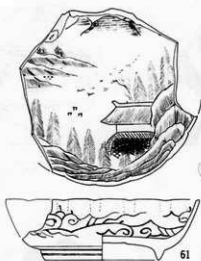
第24図 出土遺物(3)



第25図 出土遺物(4)



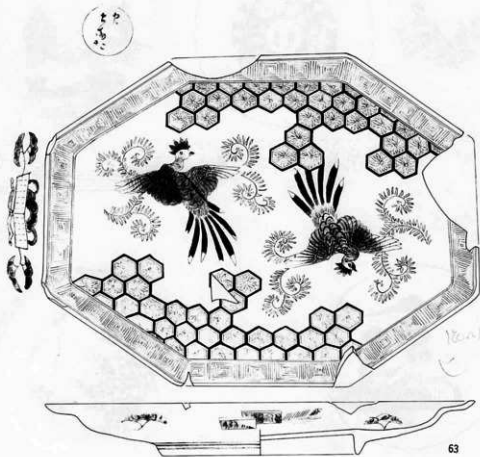
第26图 出土遗物(5)



61



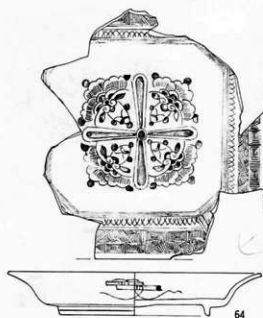
62



63

耳 虎
李 虎

第27图 出土遺物(6)



圖

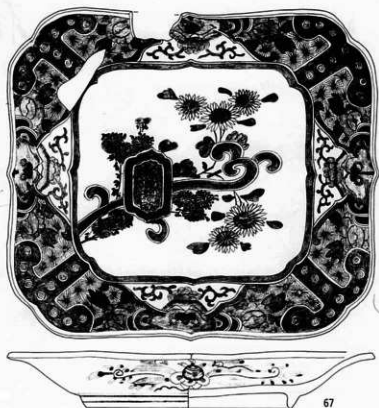
64



65

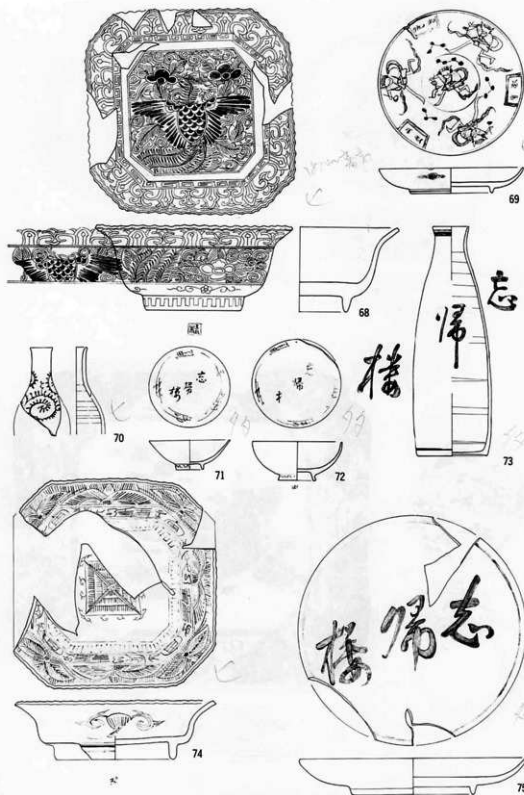


66

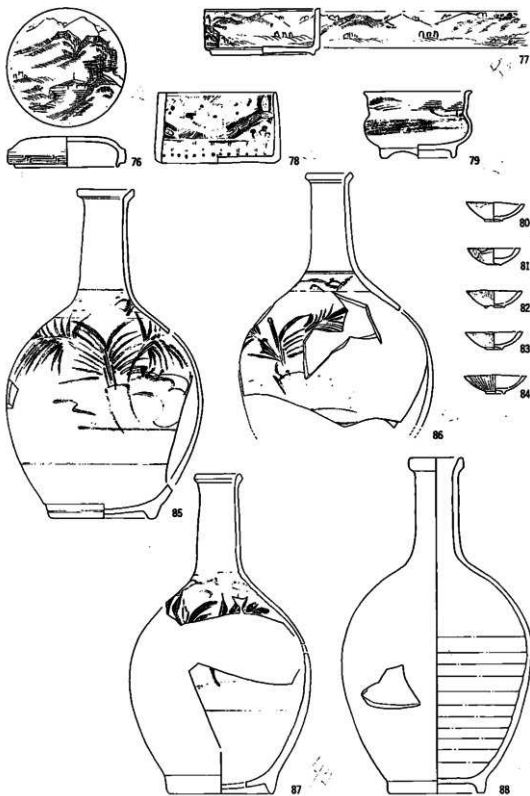


67

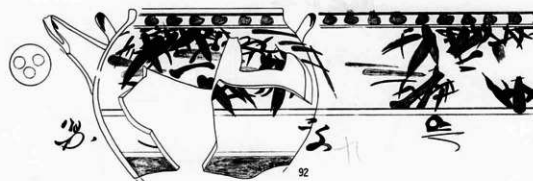
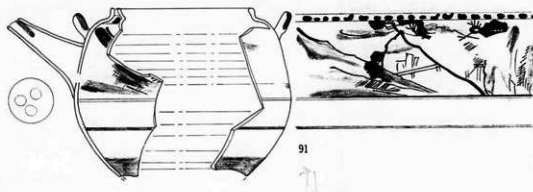
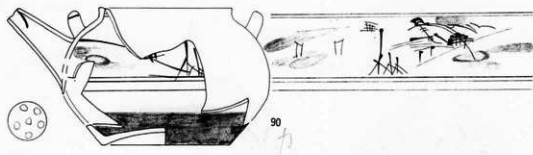
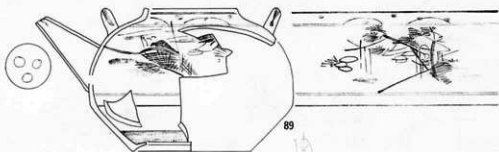
第28圖 出土遺物(7)



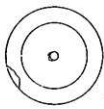
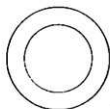
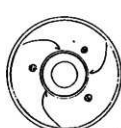
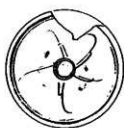
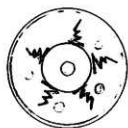
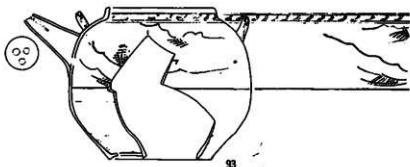
第29圖 出土遺物(8)



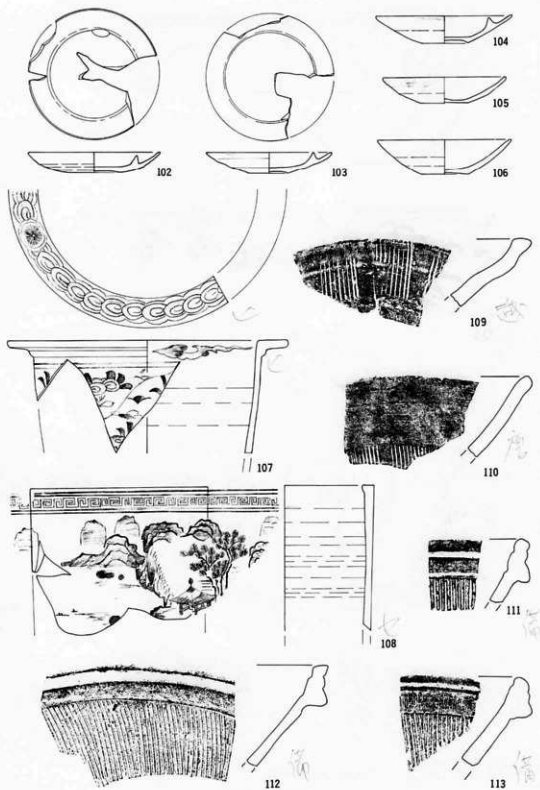
第30图 出土遗物(9)



第31図 出土遺物(10)



第32圖 出土遺物(11)



第33圖 出土遺物(12)

のほか、明治期以降の皿も大量にあったが省略してある。なお、69・75は忘帰楼で使用されたものである。鉢子、盃とともに、これらについては後述することにした。

皿には破損品を接着した焼継のものがいくつかある。中型から大型の皿に目がつき、61の高台内には朱漆で注文主とみられる墨書が入っている。

磁器には、このほか蓋物、鉢子、徳利、紅皿、蓋、植木鉢などがある。植木鉢は、いずれも個体としてのまとまりはよくないが、呉須の発色も絵付も良い。

陶器は磁器の約3分の1の出土であったが個体としてまとまるものは少なかった。特定のものを除くと、産地のよく分からないものがほとんどである。図示しておいたのは土瓶及びその蓋、灯明皿である。このほか壺、鉢、甕、片口、皿、徳利、ほうろく、その他不明品などが多数あった。

2. 擺 鉢

今年度の資料は、明治期及びそれ以降の時期のものが圧倒的に多かった。こうした中で比較的特徴的なもののみ図示しておいた。これらは、いずれもこれまで城内から出土しているものと同じで、越前、唐津、備前のものである。

3. 瓦

陶磁器に次いで出土量が多い。この傾向は例年の調査と同様である。ほとんど破損品で傷のないものは極めて稀である。使用できるものは、可能な限り再使用したためとみられる。

種類別では棧瓦が最も多く、軒瓦、丸瓦、袖瓦、平瓦、甍斗瓦、鯉面戸、鬼瓦などがあつた。これらは、無釉のいわゆる燧瓦が圧倒的に多かった。図示したもののうち、軒瓦の文様は瓦当は巴文のみで、松前家の家紋の入ったものは今年度は出土していない。なお、巴文には連珠の付くものと付かないものがある。ほとんどは均正唐草文であるが、115のように鯉面文とみられる文様のものは今年度新たに発見されたものである。

4. 石 製 品

石臼は3点図示しておいた。いずれも熱を受けている。花崗岩製の破損品ばかりである。良質の花崗岩は松前には産しないから本州から搬入されたものであろう。ただし、製品としての搬入か、松前で製品に加工されたものかは不明である。

第39図55～59は硯である。完形品はない。55は裏面に「赤間関」の陰刻がある。従来も出土している山口県産の硯である。60は砥石の欠損品、仕上げ砥である。

5. 金属製品

この分類の中に古銭、煙管も含めておいた。金属製品は、図示したものについては観察表を付

表-1 出土陶磁器等観察表

国版No.	学号版	出土区	種別	器種	計測値(口徑×底径×高)cm	産地、年代、文様等
第22図1	国版14	外堀	磁器	皿	— — —	中国製、染付 高台付砂塔唐
2	2	2	2	碗	(11.5) — —	2, 2
3	3	S F-11	2	皿	— (6.0) —	2, 2, 高台内に砂塔唐
4	4	外堀	2	2	— (10.2) —	2, 2, 外面に粗い貫入有
5	5	SG-15トレンチ	2	2	— (13.5) —	2, 2, 孔雀文、貫入有、高台内は無軸
6	6	外堀	2	碗	— (3.8) —	2, 2, 花蝶文
7	7	2	2	皿	(12.0) (6.9) 3.8	2, 2, 唐草文
8	8	2	2	2	— (14.0) —	2, 2, 高台に砂塔唐
9	9	SG-14	2	2	— (7.1) —	2, 2, 2
10	10	2	2	2	— (6.2) —	2, 2, 宝雲文、高台に砂塔唐
11	11	外堀	陶器	2	— (3.9) —	唐律、胎土灰赤褐色、灰釉、砂目肌、高台無軸
第23図12	2	2	陶器	碗	(7.2) (3.3) 4.8	肥前、染付、花文に唐老か
13	13	2	2	2	7.2 3.7 4.7	2, 2 松原帆船文
14	14	2	2	2	4.0 3.4 5.2	2, 2 草花文
15	15	2	2	2	8.5 3.4 4.05	2, 2 横線文
16	16	2	2	2	(9.9) 2.8 4.6	2, 石松文、コンニャク印判
17	17	2	2	2	9.6 4.4 5.2	2, 2
18	18	2	2	2	(8.8) 3.2 4.5	瀬戸美濃、幕末〜明治初、瑠璃釉
19	19	2	2	2	4.2 3.0 5.3	染付 草花文、面の文字あり
20	20	2	2	2	(8.8) 3.4 4.3	瀬戸・美濃、染付、横線文
21	21	2	2	2	(8.6) 3.7 4.8	2, 2
22	22	2	2	2	(8.4) (3.8) 4.4	肥前、染付 瑠璃文、見込に文字文有
23	23	SG-15トレンチ	2	2	(9.0) (4.7) 4.4	2, 2, 2
24	24	外堀	2	2	10.2 5.75 5.45	2, 2, 花文、見込文様有、広東型
25	国版15	2	2	2	(9.4) 3.6 4.7	2, 2
26	26	A, SA-13	2	2	(10.3)	肥前、染付 唐草文、見込文字文「太化虫成」
27	27	不明	2	2	(12.4) (5.1) 6.5	2, 2 蛸唐草文、高台銘「太化虫成」被熱
28	28	SG-14	2	2	(10.7) 6.4 5.6	2, 2, 花(菊)横文
29	29	外堀	2	2	(12.0) 5.2 6.3	2, 2, 花と大炎宝珠文
30	30	2	2	2	(11.0) 3.8 5.8	2, 2, 肥前・美濃、金襴地色、染付、高台無軸、高台銘「太化虫成」
31	31	不明	2	2	(9.8) 3.4 5.0	2, 染付、見込文有
第24図32	2	外堀	2	2	(10.3) (4.0) 5.3	2, 2 並草唐文、見込文様有「文字文」
33	33	2	2	2	10.6 4.2 5.5	2, 2 内・外面に太い横線文
34	34	2	2	2	— 4.6 —	箱屋製、1858〜1862年、高台銘有「函館」
第24図35	国版15	外堀	磁器	碗	12.2 5.2 5.9	肥前、染付 牡丹唐草文
36	36	2, SB-13	2	2	11.4 5.2 6.4	2, 2 唐文、見込文字文、高台内、象鼻あり
37	37	2	2	2	10.5 4.1 5.8	2, 2, 2
38	38	2	2	2	10.6 4.6 6.15	2, 2 牡丹唐草文、見込文様有
39	39	不明	2	2	10.9 4.3 6.15	2, 2, 見込文様有
40	40	外堀	2	2	10.6 4.6 6.0	2, 2 水調梅花文、見込文様「寿」
41	41	2	2	2	10.8 3.6 5.4	2, 2, 花文、見込文様「寿」
42	42	SG-14	2	2	10.6 4.5 5.2	2, 2, 見込文有
43	43	外堀	2	蓋	9.0 3.5 2.4	瀬戸・美濃系、2 水調梅花文
44	44	2	2	蓋	10.2 4.2 2.7	肥前系、2 竹と笹文、見込松竹梅、高台銘有
第25図45	2	2	2	蓋	9.2 3.8 2.75	2, 2 格子線文
46	46	不明	2	2	9.4 3.6 2.9	2, 2 唐草に草花文
47	47	外堀	2	2	(9.3) 4.0 2.6	瀬戸・美濃系、2 草文、見込/年輪/高台銘方に草花字
48	国版16	2	2	2	9.3 3.4 3.1	肥前系、2 龍と雲草文、高台銘方に草花字
49	49	2	2	2	(9.4) 3.7 2.8	2, 2, 肥前・美濃、2 牡丹唐草文、高台銘方に草花字
50	50	2	2	2	(9.4) 4.0 3.0	2, 2, 2 草花文、2, 2

図版No.	写真出版	出土区	器種	計測値(口徑×底径×高)cm	産地、年代、文様等
51	不明	不明	不明	9.6 3.7 2.7	、 、 唐所に遺存する文、見込文様、高台銅甕
52	外堀	不明	不明	(9.6) 3.9 2.2	、 、 草花文、見込文様、 、 、
第26図53	SG-14	不明	甕	13.5 8.1 3.8	、 、 1700-1800年代、草花文様、見込文様、高台銅甕
54	外堀、SD-14	不明	甕	11.0 5.8 3.4	、 、 唐所に遺存する文、見込文様、高台銅甕
55	SD-14	不明	不明	10.0 5.5 3.45	、 、 山水一景文に草花文、貫入有、口銅
56	外堀	不明	不明	9.5 5.6 2.2	、 、 唐所、あやめに草文、高台銅、方銅文様
57	不明	不明	不明	14.5 8.5 4.5	、 、 青磁染付 花牡丹向蝶文、高台銅有、口銅
58	外堀	不明	不明	(14.3) 8.5 4.4	、 、 染付 山水横間文
59	不明	不明	不明	14.0 8.3 4.5	、 、 、 、 口銅
60	不明	不明	不明	15.6 9.0 5.1	、 、 花蝶文、漆器
第27図61	不明	不明	不明	(15.5) 9.0 4.9	、 、 漆器、山手横間文、外面唐文、高台内面唐文
62	図版17	不明	不明	— 10.4 —	、 、 花牡丹文
63	不明	不明	不明	(34.4) 15.7 4.2	、 、 18C-19C頃、草花文、見込文様、高台銅甕
第28図64	外堀、A-3	不明	角 皿	(20.4) 12.0 3.45	、 、 18C-草文、唐文、高台銅方に変形字
65	SD-II, SE-II	不明	不明	(14.8) 8.7 4.3	、 、 18C-草文、唐文、見込文様、高台銅甕
66	外堀	不明	皿	(10.2) 6.6 1.7	、 、 山中家屋文、外面唐草文
67	不明	不明	不明	(29.2) 16.4 4.4	、 、 菊花四方彫文、高台銅「乾」
第29図68	図版18	不明	鉢(角)	(15.8) 7.6 6.8	、 、 口縁唐草文に唐文、高台銅有
69	不明	不明	皿	11.6 6.6 2.0	、 、 1890頃、型紙唐染付、動物文、文字文
第29図70	図版18 外堀	不明	磁 器	1.70 — —	肥前系、染付 納唐草文
71	SB-13	不明	小 杯	6.5 2.2 2.35	多治見、唐文、文字文「和用御料唐文」
72	外堀	不明	不明	(7.2) 3.1 3.1	、 、 、 、
73	SB-13	不明	徳 利	2.8 5.4 18.3	、 、 文字文「忘帰様」、徳德利
74	SF-8	不明	皿(八角)	(16.2) (9.4) 4.7	肥前、?、高台銅有
75	外堀	不明	皿	18.4 9.8 2.9	多治見、文字文「忘帰様」
第30図76	不明	不明	唐(唐文)	8.4 — 2.4	、 、 染付 山水横間文
77	不明	不明	段 底	9.2 8.2 3.7	、 、 遠島帆船文
78	外堀	不明	不明	(9.4) (8.9) 5.7	、 、
79	不明	不明	青立?	8.6 5.8 5.3	、 、 染付 遠島樹本文
80	不明	不明	紅 皿	4.65 1.45 1.6	、 、 18C頃
81	不明	不明	不明	4.2 1.15 1.35	、 、
82	不明	不明	不明	4.45 (1.35) 1.45	、 、
83	不明	不明	不明	4.6 1.3 1.4	、 、
84	不明	不明	不明	5.0 1.5 1.4	、 、
85	SG-14	不明	徳 利	4.4 8.4 16.3	、 、 染付 草文、通い、徳利
86	外堀	不明	不明	3.8 — —	、 、 、 、
87	不明	不明	不明	3.5 (9.3) 25.5	、 、 、 、
88	不明	不明	不明	4.4 7.7 26.7	、 、 貫入有、
第31図89	図版19 外堀B	陶 器	土 瓶	7.6 9.6 11.5	関西系か、鉄軸、染付 山水横間文
90	外堀	不明	不明	10.6 10.4 11.0	、 、 、 、
91	不明	不明	不明	11.4 10.2 13.4	、 、 、 、 山水文
92	不明	不明	不明	12.4 — —	、 、 、 、 唐文
第32図93	不明	不明	不明	8.8 8.2 12.2	、 、 、 、 山水文
94	不明	不明	不明	(8.9) — —	、 、 、 、 山水文、注口部欠
95	不明	不明	蓋	7.8 — —	、 、 土瓶の蓋、鉄軸
96	不明	不明	不明	7.9 — —	、 、 貫入有、
97	不明	不明	不明	6.8 — 3.7	、 、 、 、
98	不明	不明	不明	7.4 — 3.3	、 、 、 、
99	不明	不明	不明	6.0 — 1.0	、 、 油産しの蓋、貫入有、透明釉
100	不明	不明	不明	5.4 — 1.6	、 、 中蓋

図版No.	写真図版	出土区	類別	器物	計測値(口径×底径×高)cm	産地、年代、文様等
第32図101	図版19	外堀	磁器	蓋	6.0 4.4 —	肥前系、染付 七草手唐草文
第33図102	図版20	"	陶器	灯明皿	10.6 4.0 1.5	受付灯明皿、内面外口縁部通明釉、貫入有
" 103	"	"	"	"	10.2 3.4 1.5	"、"、"
" 104	"	"	"	"	10.8 3.9 2.2	"、"、"
第33図105	図版20	不明	陶器	灯明皿	9.9 3.9 2.1	内面外口縁部通明釉
" 106	"	外堀	"	"	10.8 3.7 2.8	" 既他、貫入有
" 107	"	"	磁器	植木鉢	(22.4) — —	肥前系、染付 花卉文、雙龍
" 108	"	"	"	"	(14.2) — —	瀬戸・美濃、" 山水樓閣文
" 109	"	"		鍬 針	— — —	越前系
" 110	"	"		"	— — —	唐津、鉄軸
" 111	"	"		"	— — —	備前系、"
" 112	"	"		"	— — —	"、"
" 113	"	"		"	— — —	"、"

しておいたので参照していただきたい。

古銭には明治以降のものが若干あったが省略してある。これ以前のものは寛永通宝のみで、30点ほどの出土があり、10点のみ図示しておいた。古寛永と新寛永があったが、裏面に文字や文様の入ったものはない。

このほかの金属製品は、素材別では鉄製品のほか銅、真ちゅう、鉛製品があった。用途別では釘、鋏、鋸、くさび、覆金具などの建築用のもの。銃弾、鉋などの武具。鍋、火箸、把手などの日用品、鏡、煙管などのほか用途のよく分からないものがあった。これらの中では、例年同様釘類が最も多く、用途に合わせて大小各種あった。図示したものは、そのうちのごく一部分である。

鏡は、厚さから柄鏡の欠損品とみられ、裏面は松と二羽の鶴、丹頂の文字を陽刻しているものである。銃弾は、今年度は2点出土しており、いずれも鉛製である。洋式銃の弾丸であり、使用によって先端部が潰れている。明治元年の福山城攻防戦に関わりのある資料であろう。5は形状から素焚かとも考えてみたが、この種のものはまだ出土しておらず、用途不明のものである。

煙管は8点出土している。雁首と吸口が分離するタイプと、これが一体となったいわゆる延煙管とがある。雁首部は、灰落しのためいずれも潰れが顕著である。13はメッキを施されているらしく光沢がある。錆も少なく、明治以降の製品であろう。

6. 縄文時代の遺物

前述したように堅穴住居址が2軒確認されており、調査区のうち、崖寄りの区域は縄文時代の集落址だったらしい。これを示すように、土器、石器合せてコンテナ1箱分の出土があった。

編年別では中期の円筒土器上層式のもの(2)、中期末葉以降後期初頭あたりに位置付けられそうなもの(3～19)、後期後葉の十腰内Ⅱ・Ⅴ、三ツ谷、堂林式に相当するもの(1)、晩期初頭の上ノ国式の含まれるもの(20～22)があった。この中で、1は町内でも類例の数少ないものである。石器には剥片石器が僅かと石斧、擦石が出上している。



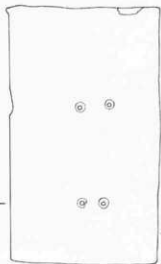
114



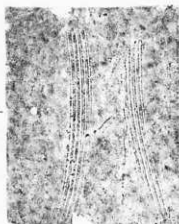
115



116



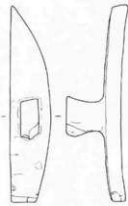
117



118

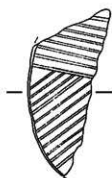
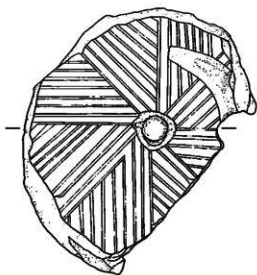


119

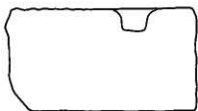


120

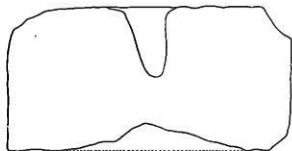
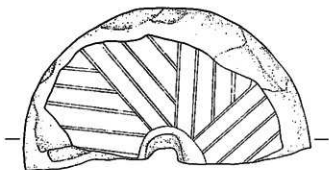
第34図 出土遺物(13)



122

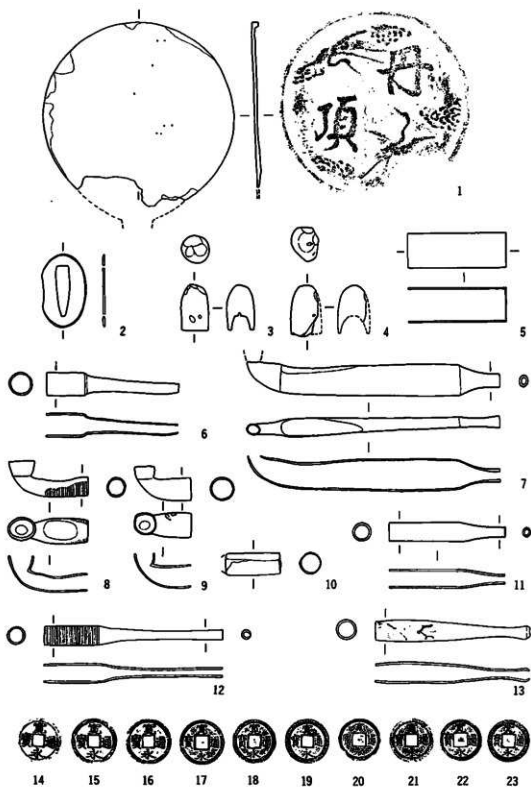


121

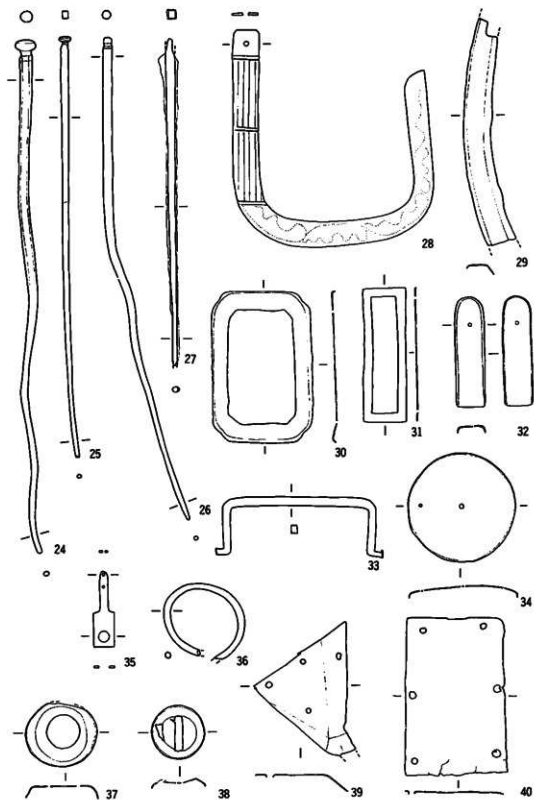


123

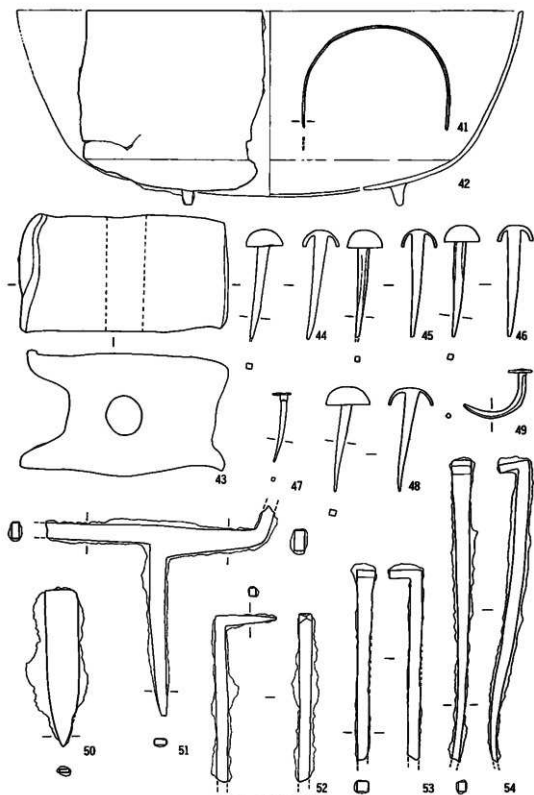
第35圖 出土遺物(14)



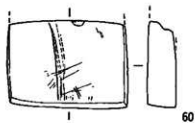
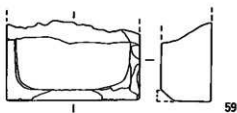
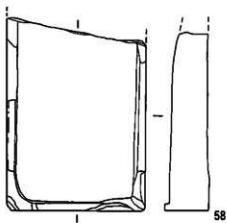
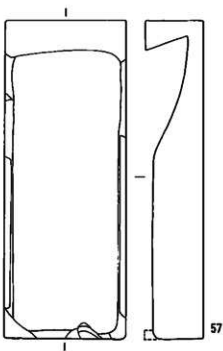
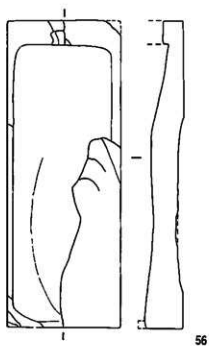
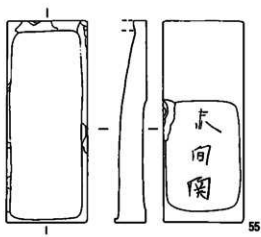
第36圖 出土遺物(15)



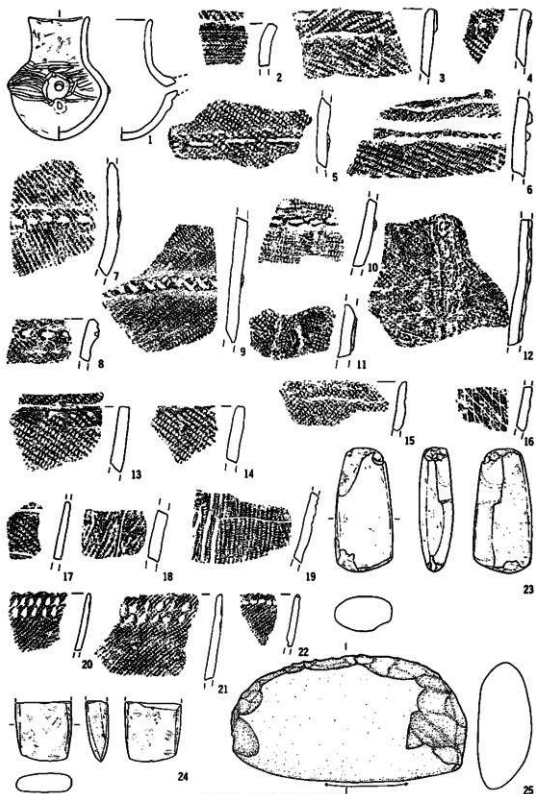
第37圖 出土遺物(16)



第38圖 出土遺物(17)



第39図 出土遺物(18)



第40図 縄文時代の遺物

表-2 金属群類観察表

国版No	国版	出土区	品名・種別	計測値(長・幅・厚・cm)	重量(g)	備 考
第36国	国版22	SE-8	鏡	98.3 × 10.1 × 0.29	88.60	銅製、鏡縁の一部剥落、柄の部分欠落
" 2	"	SG-14	鏡	3.86 × 2.3 × 0.10	3.50	"、附付者
" 3	"	外堀	鉄製	2.44 × 1.48 × 1.40	29.00	銅製、先端部腐蝕、少し歪曲
" 4	"	"	"	2.70 × 1.81 × 1.38	33.40	"、腐蝕欠損、歪曲
" 5	"	"	銅製(?)	5.21 × 1.80 × 1.80	15.90	鉄製
" 6	"	"	煙管・吸口	7.08 × 1.22 × 1.23	7.90	"、得手、ろう接合、附付者
" 7	"	"	"・延煙管	13.46 × 1.62 × 0.90	36.80	"、大量欠損、煙管部字口が一部
" 8	"	"	"・煙首	4.18 × 1.38 × 1.70	9.20	"、灰漬しみの痕跡あり、平行状破損
" 9	"	"	"・"	3.01 × 1.34 × 1.50	7.10	"、銀号らしい刻印有、附付者
" 10	"	"	"	2.86 × 1.21 × 1.20	4.30	"、ろう接合、欠損
" 11	"	"	"・吸口	6.21 × 1.05 × 1.05	8.20	"
" 12	"	SG-13、トレンチ	"・"	9.45 × 1.05 × 1.05	8.40	"、附付者、平行状破損有
" 13	"	A, SA, SB-9	"・"	8.18 × 1.11 × 1.08	15.50	材質不詳、長・幅線文様有、めっき
" 14	"	外堀	寛永通宝	直径 2.43 厚さ 0.11	3.60	古寛永、延宝(1673~1680)
" 15	"	"	"	" 2.46 " 0.15	3.60	"、"
" 16	"	"	"	" 2.41 " 0.12	2.70	"、"
" 17	"	"	"	" 2.37 " 0.11	2.10	新寛永、延宝(1673~1680)
" 18	"	"	"	" 2.33 " 0.11	2.10	"、"
" 19	"	SH-11, 12	"	" 2.39 " 0.13	2.90	"
" 20	"	外堀	"	" 2.28 " 0.10	1.60	"、元文(1736~1740)、周縁腐蝕
" 21	"	SG-14	"	" 23.6 " 0.14	2.80	"、均造年代不詳
" 22	"	外堀	"	" 2.24 " 0.11	2.40	"、"
" 23	"	SH-14	"	" 2.29 " 0.11	1.90	"、"
第37国44	国版22	外堀	火箸	27.0 × 1.07 × 1.06	42.00	銅製、六角形に面取、歪曲
" 25	"	"	"	23.0 × 0.67 × 0.64	19.00	"、唐草文が彫り込まれている
" 26	"	"	"	26.2 × 0.47 × 0.47	25.60	"、歪曲
" 27	"	"	"	17.3 × 0.95 × 0.98	20.40	鉄製、腐蝕し欠損
" 28	"	"	勝金具	11.5 × 1.47 × 0.13	38.00	銅製、両面に唐草と線文様有
" 29	"	SH-12	名称不明	12.10 × 1.60 × 0.60	8.20	"、歪曲
" 30	"	A, SA, SB-9	"	7.90 × 5.21 × 0.40	5.20	"、少し歪曲
" 31	"	外堀	"	7.09 × 2.26 × 0.03	1.50	"、用途不明
" 32	"	SB-13	勝金具	5.78 × 1.53 × 0.10	6.60	"、勝金具の一部
" 33	"	外堀	把手	8.91 × 3.00 × 0.36	15.00	"、引出し用の把手
" 34	"	SG-11	名称不明	5.68 × 5.70 × 0.60	13.50	"、少し歪曲
第37国43	国版22	外堀	名称不明	4.00 × 1.12 × 0.11	3.00	銅製、用途等不明
" 36	"	A, SA-12	輪	4.35 × 3.73 × 0.34	8.30	"、用途不明
" 37	"	外堀	名称不明	3.82 × 3.29 × 0.50	4.30	"、勝金具の一部、少し歪曲
" 38	"	"	"	2.79 × 2.82 × 0.50	1.40	"、"、破損
" 39	"	"	銅板	6.00 × 5.00 × 0.90	11.20	"、肉部磨損、釘穴痕4
" 40	"	"	"	8.30 × 5.15 × 0.60	11.80	"、全体に歪んでいる、" 6
第38国41	国版23	SB-13	把手	15.80 × 0.96 × 0.15	12.30	"、急須等の把手
" 42	"	外堀	鉄鍋	12.35 × 10.00 × 0.29	150.00	鉄製、破片、腐蝕、鋸歯有
" 43	"	"	玄鉾	11.00 × 6.20 × 6.30	1,978.00	"、両端凹む、附付者
" 44	"	SH-14	銅釘	5.75 × 1.88 × 1.88	14.00	銅製太鼓釘、先端欠、少し歪曲
" 45	"	SG-14	"	5.66 × 1.80 × 1.82	13.50	"、"、"、"
" 46	"	"	"	6.00 × 1.80 × 1.85	17.20	"、"、"、"
" 47	"	SH-14	"	3.75 × 0.96 × 0.95	2.00	"、"
" 48	"	"	"	5.65 × 2.32 × 2.35	14.20	"、太鼓釘、先端磨損付者、"
" 49	"	"	"	5.20 × 1.30 × 1.25	6.50	"、歪曲著しい
" 50	"	外堀	錠	8.38 × 3.20 × 1.72	43.50	鉄製、腐蝕著

図版No.	写真図版	出土区	品名・種別	計測値(長・幅・厚cm)	重量(g)	備 考
第38図51	図版23	S F-12	名称不明(釘類)	10.40 × (12.20) × 1.15	62.00	鉄製、腐蝕著
“ 52	“	外堀	鋸	8.96 × 3.46 × (1.26)	30.20	“、”、欠損
“ 53	“	“	鉄釘	(10.36) × 1.28 × 1.95	29.00	“、”、先端折欠損、両面
“ 54	“	S L-11	“	(16.70) × 1.20 × 1.90	50.70	“、”、”

N. ま と め

以上のように、本年度の遺構・遺物の概要を見てきた。既にそれぞれの項の中でまとめを述べてきたが、ここでは全体を通観して、調査の成果と今後の課題を記しながら若干のまとめとしておきたい。

外堀については、おおよそ次のようになろう。まず、外堀終端部の位置とその構造を明らかにしたことである。上部の石垣は抜かれていたものの、基本的な構造は残されており、今後の修復工事へ向けて大きな手がかりを得ることができた。ただ、終端部の南西側は、どの程度の高さまで石垣を積み上げるとよいのか、土層の高さとの関係があって俄かには判断は下せず、今後の課題となろう。

外堀北東隅から終端部に向かった三の丸側について、当時の生活面確定のためにはかなり攪乱を受けており、石垣天端レベルを定めるのは難しいが、他の区域を参考にするとおおよそ決められそうである。前述したように、御鉄砲置所付近での生活面レベルが15.90m、馬坂門付近でもほぼこれに近いレベルである。また、外堀のSPA-A'ラインでも同様の数値を得ている。一方、土層図を作図したSPC-C'ラインでは、これより若干高いレベルとなりそうである。同様に、外堀のSPB-B'ラインでは16.20m付近と30cmは高いようである。このように、三の丸の中でも生活面レベルは一樣ではないようで、それぞれの場所によって、今のところ30cm程度の差がありそうである。しかし、外堀の三の丸側では、石垣の天端レベルを15.90mあたりに定めておくと、少なくとも今年度の調査地域内ではほぼ収まりがつきそうである。ただ、前述したように馬坂橋付近では、三の丸(内)側の当時の路盤レベルが15.45mあたりに求められ、外堀三の丸側の石垣天端レベルをここまで下げた方がよいのか、あるいは馬坂橋の部分だけこのレベルとし、他は15.90mあたりにしておいた方が適切なかの検討の余地がある。

外堀から、縄張りには表わされていない中仕切り部が発見された。これの意味するものについては、終端部への水圧の過重を防ぐことと、堀の水位をある一定に保つという目的から考えてきた。こうした推測が正しいのか今後の課題としておきたいし、他の類例を待ちたい。

中仕切り部の北と南側では、石積み技法で若干の差があることも指摘しておいた。この理由が技術者集団の違いによる可能性も考えてみたが、外堀全体、広くは福山城石垣全体の中で、技術、技法の違いがどの程度認められるか興味深いものがある。石工集団については、今のところ史料等に全

く名が見えてこないが、石積み技法を丹念に見ることによって、あるいは何らかの手がかりを掴むことができるかもしれない。

外堀については、今後は調査を中断していた地点より西の方へ、あと30mは明らかにしてみたいと考えている。法務局松前出張所前の三叉路付近までであれば、当面の車輛の通行に支障とならず、外堀の復元も可能とみられる。勿論将来的には、三の丸側の外堀は全面的に修復したものである。

馬坂橋の位置は、既に昨年度の調査でその位置を確かめたところである。今年度は更に橋の両側の路盤レベルを明らかにできた。このことは、石垣の天端レベルもこれに準ずると良いわけで、橋の幅の確定と併せて検討すると、この箇所の修復は容易となる。

馬坂橋の素材は、縄張図の比較から木橋ではなく、石橋と推定してみた。そして、おそらく寺町御門前の橋についても同様に考えた。張り出し部石垣の最上部から発見されていた橋材の「受け」とみられる2個の削り込みの入った石の存在は、これを裏付けるのではあるまいか。ただ、橋の幅については、前述したように3間を越えることはあり得ないものの、決め手となる調査結果は出ていない。縄張図の表現でも統一性を欠いており、判断材料とはならないようである。一般的に、近くに門が存在する場合、門の間口と同様に幅をもつものか、狭くなるものか、逆に広くなるものか、他の事例と対比してみる必要があろう。

馬坂門の位置について、当初は攪乱が著しくて、ほとんど分からないのではないかと想定していた。しかし、門の礎石や敷石がなくとも、これらを据えていたとみられる砂を敷いた部分と石列、また、欄列とみられるピットの存在から、ほぼ確定できそうである。また、馬坂橋が架かっていたとみられる箇所との対応関係も、うまく合致しそうである。将来の整備へ向け、大きな手がかりを得たことになろう。

七番御台場については、今一つ明らかにできなかった。いくつかの縄張図にあるように果たして台場の周囲に石垣が積まれていたのか、縄張図の記載されている数値と発掘調査結果との相違をどう解釈すべきか、土居と台場との関係がどうであったのか残された課題は多い。幸い土居については比較的保存状態の良いとみられる部分が残っており、こうした箇所を改めて調査することによって土居の構造を先ず把握し、次に台場との関係を明らかにする必要があるだろう。土居を明らかにすることによって、上述した外堀終端部の南西側の石垣天端を確定するのに大いに参考となろう。

東部石垣は、全く新しい発見であった。縄張図に表わされておらず、地表からの観察でも全く気付かなかったものである。そうした意味では、先の外堀の中仕切り部の発見と同様に、予想外の発見があり得るという点で今後とも心して調査に臨まなければならないことを示しているといえよう。この石垣は幾分孕んではいるが遺存状態が比較的良好で、規模もそう大きなものではない。だが、福山城を訪れる人々が、バスを降りて最初に目にするのがこの石垣である。そういう意味では、城址の存在を最初に印象づけるものであり、修復整備が急がれる地域である。

七番御台場の調査の過程で、福山館時代とみられる建物遺構の一部が発見された。福山館は、

周知のように現在の本丸・二の丸地域がその範囲であった。外堀、三の丸地域は、それまで上級家臣団の屋敷地だったものを召上げ、城域として拡大したものである。宝暦年間の作とされる「松前屏風」(道指定有形文化財)には、5軒の上級家臣の屋敷が描かれている。文化11(1814)年、松前に幽閉されていたゴロウニンが居たのもこの三の丸地域にあった旧松前藩士の屋敷とみられ、『日本國図記』では「それはお城の南門の殆んど正面に当り、城壁と高い断崖の間にあった。断崖の下は市の中央部であった。家は返返しをついた、高い板塀に囲まれた、広い庭の中に立っていた」という。

松前武四郎の『三航蝦夷日誌附録 秘女於久辺志』では、「弘化年間之図」に三の丸地域の天神坂側から藤倉織部、下国登前、蝦崎村監ら3名の屋敷名が見えている。同書では藤倉の屋敷は元松前内蔵の屋敷であったという。同図では三の丸地域について詳しい描写ではないため正確には分らないが、藤倉の屋敷は六番御台場付近にあったとみられる。

これより先の幕府直轄時代(文化4～文政4年)以前に描かれた市中国(「松前城下之図」北大北方資料室蔵)では、大手を上げて左に谷梯衛守、右に蝦崎左京の屋敷地が見えている。更に、七番御台場付近には時鐘堂の建物が見えている。この時鐘堂は、他のいくつかの市中国にも描かれており、存在していたのは確実のようである。

このように、三の丸地域には上級家臣の屋敷や他の施設があり、調査を進める中で追々明らかにされる機会もあろうが、松前ではこうしたものがまだ調査されることがないだけに興味深いものがある。

遺物については、今年度は出土量が多い割合に古い時期のものが少ないという特徴を指摘できよう。こうした中で、福山城とは直接の関係はないが、明治時代の料亭忘帰楼で使用された陶磁器が多量に出土していた。特に磁器は忘帰楼の注文書の控えが史料として残っている。これと対比してみると、当時の流通関係を知る上で興味深いものがあるので紹介しておこう。忘帰楼は福山城が解体された後、明治21年に当時の松城町11番地(現宇松城99番地)に佐藤与一によって開業された料亭で、明治35年まで営業をつづけている。西洋料理を売り物とし、当時の新聞記事を見ると、城下町ではなくなったとはいえ、まだ相対的に経済力のあった福山町ではずいぶん繁盛していたようである。

遺物は前述したように外堀終端部付近に掘られたゴミ穴から多量に出土していた。その代表的な鍔子、皿、盃を5点だけ図示しておいた。数量的には、それぞれ数十個体単位で出土しているものである。これらは、長野県在住の末裔佐藤元昭氏所蔵の「諸用録」によれば、注文先は美濃国土岐郡多治見の齊藤政六商店であった。製造元は同じく多治見の加藤新吉、加藤久治郎、可見郡の日比野新七店であった。盃には「忘帰楼」の金文字が入っており、この文字は製造元ではなく、東京日本橋の元柳瓦鉢壺と京橋の洲留壽嘉商会の2軒の焼付所へ依頼している。

当時の荷造は鍔子(2合入)120本を1俵とし、小皿は300枚入を1俵としたらしい。この運賃は1俵に付、多治見から堀川までが銀2匁、堀川から四日市までが銀8匁、四日市から函館まで船便で27匁であったという。製品は4等級に分け、1等を「飛切」、2等は「飛」、3等は「大板」、4等は

「上」という符丁で呼んだようである。

瀬戸・美濃の製品は幕末ころから松前に入りはじめ、明治期には肥前のものを完全に凌駕するようであり、こうした具体的な流通のあり方の分かる資料として貴重であるといえよう。

以上、平成4年度の調査の概要を記してきた。来年度以降は、二の丸側と外堀の延長を調査対象地と考えているところである。特に外堀に架かる橋の位置、三本松(羽休の松)周辺の旧路盤、この周辺の石垣、太鼓櫓の位置の確定、搦手門とこれに連なる石垣の位置の確認など調査課題は多い。また、外堀の二の丸側の天端レベルを把握することは大きな目標である。二の丸側は三の丸に比べ、明治以降の攪乱はかなり大きいとみなくてはならない。そういう意味では、調査にあたってはより慎重さとより正確さを要求される場所である。今後とも、関係各位のご指導ご助言をお願い申し上げる次第である。

写 真 图 版

図版 1



調査開始前



外堀調査状況



外堀(北側より)



外堀(南側より)



外堀終端部



同(東側より)



外堀終端部(東側より)



外堀終端部



外堀中仕切部



同(南側より)

図版 6



外堀堆積状況



杭列(正面・三本松)



馬坂橋及び馬坂門



櫓跡



七番台場跡・不明建物跡



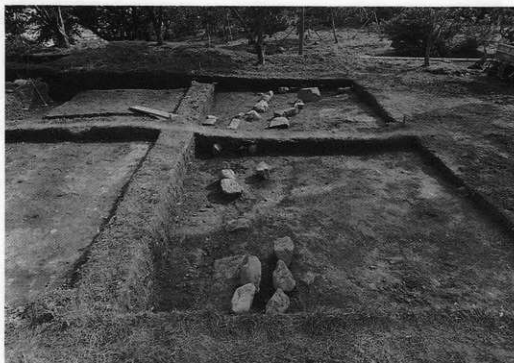
御鉄砲置所



東部石垣



同



忘帰樓排水溝



不明ピット



側溝



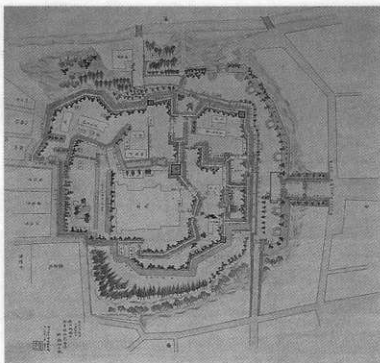
同



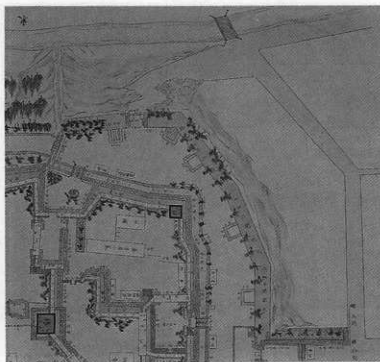
外堀B区(寺町門付近)



外堀A区

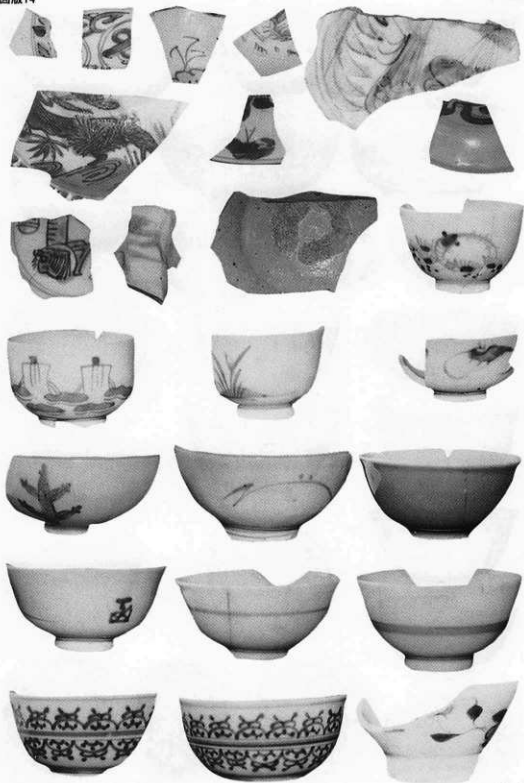


福山城見分図



同部分

図版14



出土遺物 (1)

図版15



出土遺物(2)



出土遺物(3)

图版17

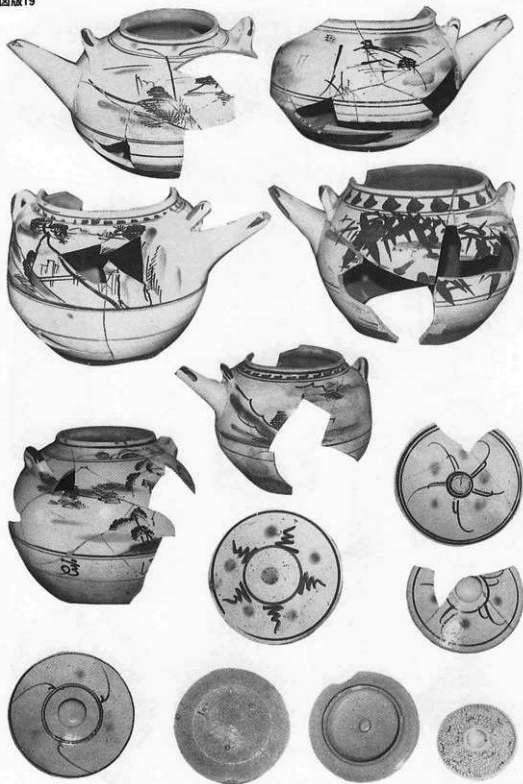


出土遺物(4)



出土遺物(5)

圖版19



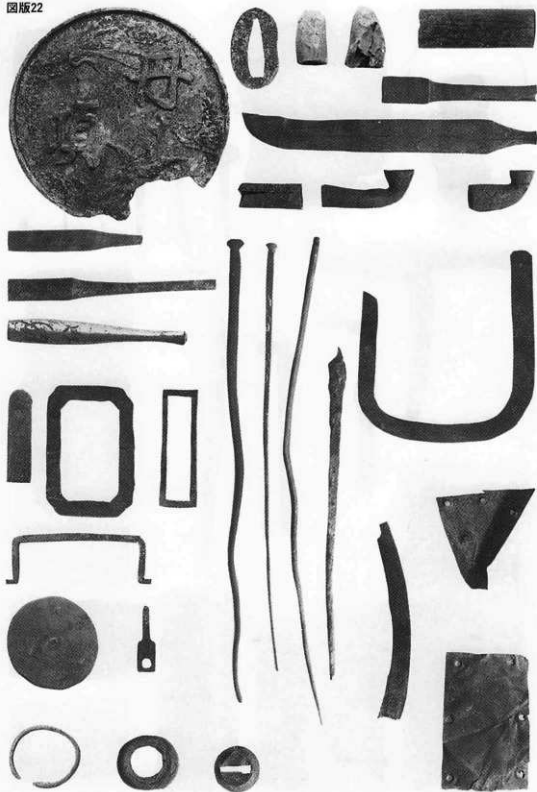
出土遺物(6)



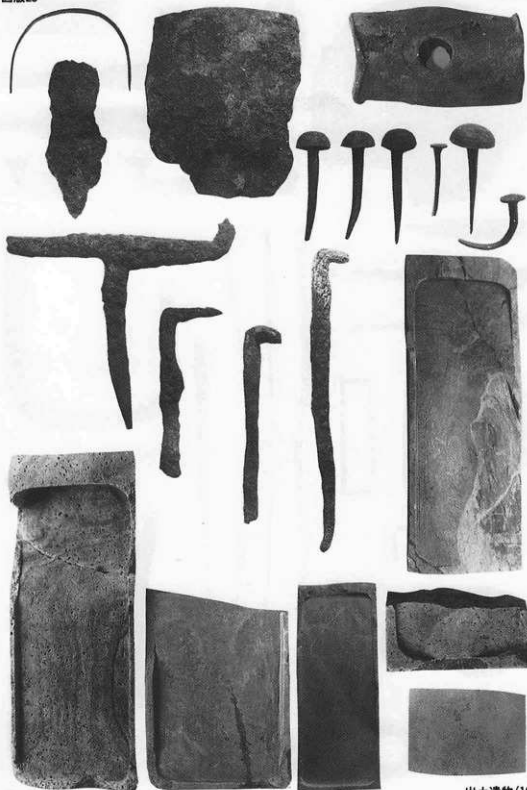
出土遺物(7)



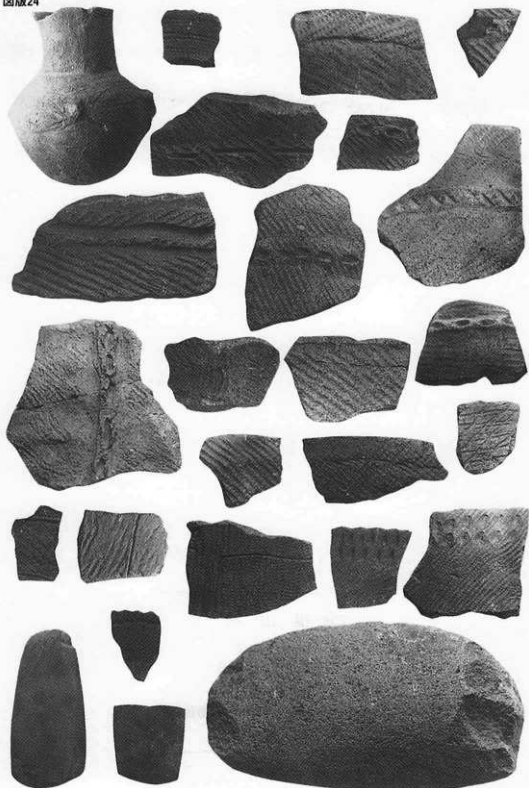
出土遺物(8)



出土遺物(9)



出土遺物(10)

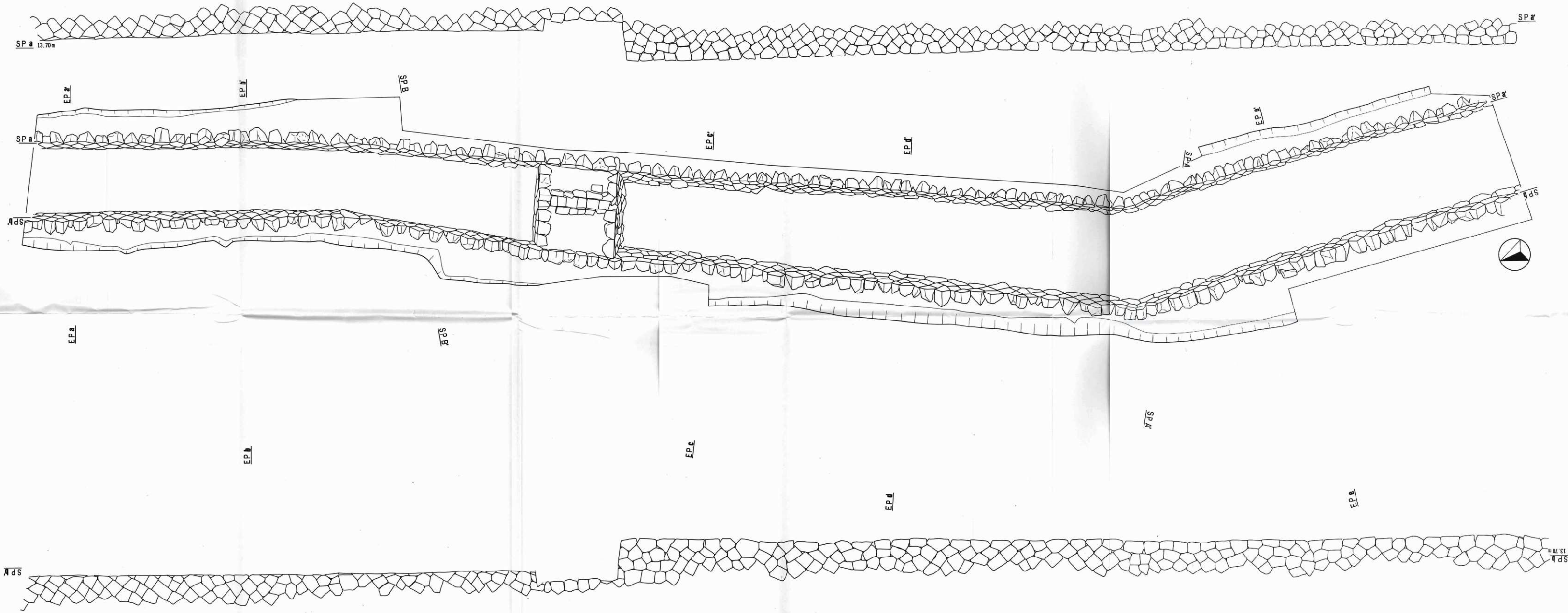


出土遺物(11)

史跡 福山城 X

平成4年度
発掘調査概要報告

発行 平成5年3月25日
発行者 北海道松前町教育委員会
印刷 カジャ印刷



付図 外堀全体図

史跡福山城 X
平成 4 年度 発掘調査概要報告
電子版

2025 年 2 月 20 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060 / FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城 X 平成 4 年度 発掘調査概要報告
(1993 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。